水彩度

梦現慧琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水彩度

【Ｎコード】
Ｎ２９７５Ｈ

【作者名】
梦現慧琉

【あらすじ】
――自殺を考えない人間は居ない。

一頁目

自殺を考えない人間は居ない。

何故ならそれは、『死』もしくは『生』の概念に触れたとき、あるいは『自身』と『他者』の隔絶を解したとき、最初かその次くらいには思いつくであろう発想だからだ。様々な宗教に於いて、自殺に対する注釈があると言うことから、人類が智慧と思考を獲得した時——宗教と言う伏線を回収するべく、洒落てみるのならば、つまり——禁断の赤い果実を口にした時から、存在する発想なのだろう。

その次に考えるのは、それを実行するか否かだ。

赤い絵の具を水に溶かし、僕は紙に線を引いた。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――

二週間前。

今日最後の授業が終わったので、僕はルーズリーフを綺麗に四つ折りし、席を立って、ゴミ箱へ捨てた。捨てたものは誰のものでもないのだから、誰が拾っても構わない——なんて理屈は、最低の屁理屈だ。しかし、その屁理屈をいとも簡単に体現する奴も、世の中に居る。

「なぁに、これ」

成績優秀であり品行方正であり容姿端麗であり明朗快活であり幼馴染ですらあり、しかし、まかり間違っても僕の恋人なんかではなくお互いの片想いすら望むべくもない、クラスメイトの女子。

保呂羽(ほろば)卯生(うう)。

彼女が折りたたまれたルーズリーフを開くその前に、迅速にその

後頭部へ手刀を振り下ろす。
「あいた」
「教えてやるから後にしろ」
そして今は責務をこなせ、掃除当番。
どうせ何を言って誤魔化しても、コイツは了承しない。物心ついた頃から知っている間柄だ。幸い他の人間は、コイツがルーズリーフを拾ったことに気付いていない。僕の取った行動は、最善と言えただろう。
「……うぃ」
後にしろ、と言うのは、放課後どうせ人の来ないであろう屋上で待っている、と言う事。卯生はそこまで理解した上で、今は何も言わず、ルーズリーフをくしゃりと握りこんで、掃除を始めてくれた。
てめぇ、折角綺麗に折りたたんだのに。

＊　＊　＊

この学校には天文台がある。しかし大概の場合、天文部しか使わない。そして逆に言えば、屋上にあるものといえば天文台くらいのもので、天文部の活動のない今日は、人が寄り付きもしないのだ。
元々あまり真面目に活動している部活だとは、言えないだろうし。
卯生はその大して真面目な活動をしていない天文部員であり、そして屋上の鍵をもっている数少ない生徒である。彼女の鞄から勝手に鍵を拝借し、屋上で僕は待っていた。天文台の中には入らず、間の階段に腰掛けて、空を眺めている。
屋上の鍵を借りることは茶飯事だから、このことに問題は無い。
問題は、と言うより面倒なのは、アイツが拾ったルーズリーフだ。
「お待たせー。いや、小学生でもないのに掃除当番とか、結構凹むよね。机移動が無いだけましだけどさ」
ひらひらと手を振って、爽やか笑顔で参上する卯生。ショートの髪が、活発な印象を促進する。容姿の通りに健康的なコイツは、人

受けも良い。
失礼ではない程度に、こちらも笑顔で応じる。
「相変わらずしみったれた顔してるねぇ」
「…………」
親しき仲でも、と言う言葉をコイツは知らないようだ。
あくまで、親しき仲は親しき仲なのだろう。
「挨拶代わりのように、軽口を叩くな。仲が良いと思われたら困るだろ？」
「えぇー、そりゃないですよ！　あたしら、幼馴染じゃん。一緒に風呂だって入ったじゃん」
「だからイコール仲が良い事にはならんだろ。記憶にも残ってない話をするな」
「哲学的ぃー」
そう言って卯生は、よいしょっと隣へ座り、ポケットからくしゃくしゃになったルーズリーフを取り出した。ぴんぴんと皺を伸ばし、中身を読もうとする。僕は今更止めはしない。
「それで。ふむ。水梳君は一体全体何を書いていたのだね」
水梳軌跡。
それが僕の名前だった。
「てか、その口調は何キャラのつもりだ」
「何様……え？　何キャラ？」
「言ってみてなんだが、大分印象が変わるな……」
「ご愁傷キャラです」
「どれだけ痛いキャラなんだ、それ」
オチがついたところで、双方仕切り直して。
「それで、きーきは何を書いていたのかな」
「ま、見てもらえばわかると思うけど」
と、普段どおりの会話を始める。
猿の鳴き声みたいなそのニックネームは、正直な話僕としてはあまり好きでは無いのだが、そこはそれ。とうの昔に諦めと折り合い

をつけた突っ込みどころだ。対抗して、『うーたん』とこちらから呼んでみた事はあったが、何それオランウータンみたいで嫌だよやめて、と言う突っ込みもさることながら、大層痛い響きだったので流行らなかった。ご愁傷キャラだ。

「首吊り……バツ。リストカット……サンカク。飛び降り……バツ。線路飛び込み……ん、バツ……。交通事故バツバツ、いっそ電柱に頭を打ち付けてバツ。……なにこれ？　小説でも書くの？」

「んにゃ、自殺プラン。僕のね」

「…………」

ちょっと、言葉を失った様子の、保呂羽卯生。怪訝そうな顔をする。

しかし、次の瞬間には笑みを……つまりは自分を取り戻したらしい辺り、流石だ。

「へへ、何のジョーク？」

「割と本気」

「ふぅん……何で自殺するの？」

フラットな表情で訊いてくる。しかしこちらが返答する前に、思い至ったように続けた。

「あ。……それって、私がこの間、君を振っちゃったから？」

ちょっとすまなさそうな顔をして、そんな事を言ってきやがる。全く、あれは壮絶な振られ具合だったからな。好きですという僕の言葉に対して……

あはははは、何それギャグですか、冗談ですか、それにしてももう少し気の利かせ方があるんじゃないですか、ところで釣鐘に提灯って言葉を知ってる、釣り合いが取れないって意味なんだけれど、正にこの状況にピッタリじゃない、なんだか惨めね、藁にも縋る思い、高嶺の花、ごめんね、あたし彼氏いますからー。

と言うのが、卯生の振り文句だった。散々だ。しかも、それを目撃していた人間が少なからずいたと言うのだから、泣き面に蜂でも足りないくらいだ。噂は火急の如く広まり、惜しまれる事無く尾ひ

れが付いた。だが、しかし。
「違うね」
「それじゃぁ、前回返却された中間試験の結果で、やたら得意にしていた生物の点数が、二十六点と言う悲惨なものだったから？」
生物は僕の得意科目だ。なぜかは知らないが、やたら簡単なのだ。教科書を一度読んでおけば、九割はかたい。２・３度読み通せば、間違いなく満点が取れるだろう。自慢にしたつもりは無いけれど、周囲の人間はその事を知っている。だから、僕が今回の中間で取った二十六点と言う点数は、思いの他簡単に広まった。真面目に勉強するよりも、よっぽど手間隙かけてそれらしい間違え方を研究したので、努力が報われた感じだ。
「いや。あれはわざとだな。アミロースとアミラーゼを間違える奴なんて、本当にこの世にいるのかよ？」
「うーん……なら、あれか。校門の前で、エロ本を数冊ぶちまけちゃった事件」
あれは確かに、やっていて随分恥ずかしいものがあった。まず購入で難関その一。なるべくマニアックそうなのを三冊と、広く受けそうなものを二冊購入。両親にばれないように難関その二。そして最後にして最大の難関は、いかに不自然じゃなく、人の多い時間帯に校門の前で躓くかだ。やり遂げた僕は、不必要になったそれら雑誌を、きちんと分別して処分した。
「それもＮｏ！　エロ本を購入する趣味は、そもそも持ってない。家宅捜査にも笑顔で二の返事。応じてやるさ」
「なら、何が理由？　それに、なんでそんな事したのよ？」
思い当たる理由が他に無くなったのか、唇を尖らせて、再度彼女は訊いてくる。その返答は、どちらに対しても一言だ。取り付く島も無いくらいの、簡潔な、完結している一言。
「自殺がしたいから」
「んー……、あそう」
思うところがあったようだけれど、結局反応は簡単なものだった。

僕は続ける。
「実質実際、自殺に理由は必要無いと思うよ。他人を殺すのだとしたら、それは他の人間――第一に殺された相手へ、第二に遺族へ、第三にそれこそ第三者への言い訳が必要かもしれない。けれど自殺なんて、最低限自身が納得出来ていれば、それで十分なんじゃないかな。突っ込み入れられたとしても、死んでしまったら釈明なんて出来ないんだし」
「今現在あたしが突っ込み入れてるじゃんか」
「まーね。けれどしてみたいものは仕方が無い。その方法を考えてたんだよ」
「うーん。突っ込み入れたくはあるけれど、理解できないことはないかな。…………」
少し、卯生は考えるようにする。同じ年代、同じ社会に生きている若者同士、決して理解できない感覚ではないだろうと思う。誰だって、自分が死んでしまったら……、他人を殺してしまったら……、等と思いを馳せてみた事があるだろう。何の脈絡も無く、ふとした思い付きのように。
自殺を、してみたい。あるいは、人を殺してみたい。
それは勿論いけないことだ。禁忌だ。禁止事項だ。厳罰だ。処罰対象だ。だから、実行には起こさない。現実にしない。ある程度の常識と教養、並びに周囲の理解さえあれば、それが自殺や殺人に対する妄想の終着地点で……それゆえ頻発することは無い、と言うだけに過ぎない。
しかし、『だから』実行に移す。と言う考え方だって、否定されるべきじゃない。歴史を見れば、『困難である』ことそのものが理由となって何かが成されるだなんて、しょっちゅうあることだ。大きく出てみたが、歴史をそれほど知っているわけではないので、今の一文はただの予測だ。予測できるくらいには、在りうることだ。
「人一人の生命を終らせるのって、けっこー手間かかるからね。事後処理も大変だし。あ」

「ん、どうした？」
「自殺の『理由付け』、ってことか。告白だとか、酷い点数だとか、エロ本だとか」
気付いて貰えて、手間が省けた。
「その通りだな。遺言の内容として適当なもの、でもいいか。幸い僕は、いじめにあってないもので、理由は作っておかなくちゃいけない。僕の死後、『はぁ、真面目な子でねぇ、何でこんな事になったんだか……』と意見が被るのも詰まらないだろ？　マイクを向けられるであろう知り合い連中のために、僕は気を配っているのさ」
「ひっどいなー、きーきってば。それってあたし、君が死んだ理由になりかねないじゃん」
快活に笑う。一つの滑稽なお話であるか、のように。
いい神経をした幼馴染だ。こちらのして欲しいリアクションをしてくれる。
「って言うか、あたしにオーケー出されちゃったらどーするつもりだったの、それ」
「それは無いだろ。例え卯生に彼氏が居なかったとして、僕からの告白に応じるお前じゃない」
「まーね。告白されるくらいだったら、こっちからするよ」
「だろ」
結果オーライだったと言えなくもない。試みの内の一つで、例え振られなくても別に構わなかった。恋愛での失敗と言うのは、自殺の理由として適当だと思っただけだ。
そう言う意味で、最善の対応をしてくれた。本当にいい神経をした幼馴染である。
まぁコイツの知らないところでも、『失敗』に見せかけた失態は、いくつもやらかしている。涼しい顔をして歩けないくらいには。意図してやった事でなければ、それこそ死んでしまいたくなるだろう。穴があったら入りたい、おあつらえ向きにそこら中が墓穴だらけ、と言った感じだ。『理由』代用はいくらでも利くのである。

「確かに、割と本気なんだね」
「そう言っただろ」
卯生はしげしげとルーズリーフを再度眺めて、それから訊いてくる。
「方法吟味中ですか。吟味の基準は？」
「迷惑をかけないように、面倒くさくないように、それと絵に描いたように」
「迷惑をかけないように？」
「人身事故とか、飛び降りとか、迷惑がかかるじゃないか。後の処理やら家族やら。さっきも言ったとおり、どうせ自殺をするのなら、アフターケアも万全にしたい。特に両親に対して、僕は本当に感謝しているんだぜ。この歳まで育ててくれたこと、学費を出してくれてること、好きに生きさせてくれていること。これ以上迷惑をかけると言うのは、心苦しくてね」
「自殺がすでに迷惑だよー」
白々しく言葉を並べる僕に、いい笑顔で突っ込み。そりゃそうだ。
「だからこそ、なるべく迷惑のかからない方法を選びたいのさ。放蕩息子の最期のわがまま、そして最期の気遣いだ」
「いらねぇー。んで、面倒くさいのはいや、と」
「それは二の次かな。怠惰な若者だから、基準に勝手に入ってきちゃうんだ」
「なーる」
ふむふむ、と相槌を打つ卯生。フラットな調子で会話をしてくれるので、こちらとしても対応がしやすい。幼馴染と言うのは、こういうときに重宝するな。露見したのがコイツで助かったと言うものだ。露見しないのが最良だったのは、言うまでもないということだが……世の中、不幸中の幸いがデフォルトだろう。
「絵に描いたように、ってのは？」
「みっともない死に方は嫌だろ」
「あ、そういう意味」

どうせなら、綺麗に。
余裕ある自殺者なら、誰でも考えるはずのこと。いや、余裕ある人間が自殺を選択するのかどうか議論を生みそうではあるが、存在するとして、間違いなく少数派だろう。少数派でいると言うのは、案外気分の良いものだったりするのだ。
批判してくる多数派がいなければ、だが。
「それにしても。……そっかー……、きーき、死んじゃうのかー」
うーん、と。両手の指を絡めて伸びをしながら、感慨深そうに、卯生は言う。
「止めたりしないんだな」
「止めて欲しい？」
「いや」
即答だった。感情や思考を間に挟むまでもなく、それは明確な意見だ。
「だよねぇー。そうだろうと思ったからこそ、止めないんだよ」
「良く僕を理解してくれている。助かるね」
少しため息を吐いて、明るいまま、しかしちょっと悲しそうに、彼女は続けた。
「きーきは昔から、決めたらそれを撤回しない子だったよ。もちろん、いなくなっちゃうのは悲しいけどさ。きーきの気持ちもわかっちゃうし、きーきの対応もわかっちゃうあたしは、きーきの自殺を止める資格も権利もないと思うんだよ。そして君がこの意見に納得しちゃうのも、わかってる」
「うん。それなら、僕の次に望むこともわかるわけだな」
「誰にも言わないでくれ、でしょう」
「ビンゴ。その通り」
「聞き入れましょう。誰にも言わない」
「条件は？」
「んーとねー」
誰もが羨む、ビジネスライクな幼馴染。ギヴ・アンド・テイクで、

僕らの関係は成り立っている。非常にわかりやすく、非常にやりやすい。まったく。本当に楽な相手だ。省エネなことこの上ない。
「ななちゃんには言っちゃうよ」
「げぇー。おいおい、それは勘弁してくれよ」
前言撤回。一番面倒くさいところを突付いて来やがった。
他の人間なら、こうも的確に弱点をついてはこないだろう。
「しーなーいー。ななちゃんなら、まず間違いなくきーきを止めようとするだろうね！　それを君は回避しきれるか！　泣いている女の子を前にしたきーきの運命やいかに！」
「自分でできないからって、他人に役目を押し付けやがった！　しかも楽しんでやがる！」
「代わりに、あたしからは止めもしないし、それ以外の人には黙っていてあげるって言ってるでしょー。正当な代価だと思うけれどなぁ」
「悪魔の取引だ」
「まんまじゃん」
代償は魂で、約束は破らない。
うーむ、言いえて微妙なラインだ。
「さって。そういうわけなら、あたしも協力するよ」
くっと立ち上がって、階段の段の上で方向を変えるという、ちょっと難易度の高い日常動作をやってのけた上で、僕の顔を正面から見る。
保呂羽卯生。可愛くなりやがったコイツを正面から見つめるのは、なかなか度胸のいる行為だ。
「何に？」
「きーきの自殺方法、一緒に考えてあげる」
いらんお世話だった。
が、これは即答で断れなかった。
後から考えるに、断っておくべきだったのだろう。

▼　▼　▼

一週間と六日前。

次の放課後は、喫茶店で待ち合わせしてみた。一緒に歩いているのを見られると面倒くさい（卯生は彼氏がいる上人気者だし、僕は度重なる失態で注目の的だ）ので、時間差をつけて下校し、しかも学校から少し離れたところの喫茶店で集合だ。

卯生はラテを注文し、僕はブレンドコーヒーを注文した。ラテとオレはどう違うのとか、他愛の無い会話を経て、本題へ入った。

「これ見てて思ったんだけどさ」

くしゃくしゃ度合いの増したルーズリーフを取り出す。

まだ持っていたのか。

「マルが無いよね」

「あったらストーリーが終るだろうが」

妥当すぎるボケツッコミだな。

「サンカクがあるよね。リストカット……か」

「楽だしね。風呂場でやれば迷惑も少ない」

「けれど詰まらない？」

「そうそう」

ラテをずずずと啜りながら、卯生は頷く。僕はあの後気付いた、判断基準の補強について話した。

「昨日挙げた基準の内の、どれにも入るかもしれないんだけどさ。やっぱり、確実さと言うのは外せないよな」

「……ん。確実さ……死に損ねないってこと？」

「そうだね。死に損ねるのは他人にも迷惑がかかるし、無様だし、何より面倒臭い。そうは言っても、ある程度練習すれば、どの死に方も成功率は上がると思うけれどね」

「自殺の練習かぁ」

響きが面白かったのか、卯生は笑う。確かに滑稽な話だけど、物事を達成するためには、試行錯誤、努力と繰り返しが必要だと思う。何事にも。

ブレンドコーヒーに砂糖を入れて、僕は口にした。熱いっつーの。

「既出の案から、順に検討していってもいいかな？」

「かまわんが」

「じゃぁ、最初……首吊り！　これちょっと浪漫じゃない？」

「首吊りはなー。ぱっと見、絵的には悪くないんだが……。舞台設置が面倒なんだよ。人一人がぶら下がれる場所……途中で見つかると気まずいし……それでいて発見されなきゃ切ないし、さらにありがちなだけ、演出を工夫する必要がある。しかも、聞いた話ではさ……あれ」

「どれ？」

「肛門やらが弛緩して出るあれさ。ぶらたれてる上に、あれもぶらぶらぶちまけじゃ格好悪いだろ。それにしたって、絶食やら、何か詰めるやら、あるんだろうけれどね……そう言う前準備すら格好悪い気がするぜ」

卯生は目線を上にやった後、成る程と言った。想像しない方が良いとは思うが。

「次はリストカット。これはさっき聞いたね」

「加えるなら、これもありがちだしな。今日日、手首の傷なんて無い方がおかしいぜ」

「こらこら、世界観が誤解されるようなコトいーうーなー。はは、でも確かに、いかにもこーこーせーだよね。なら次、飛び降り自殺ー」

「ありがちだね」

「ありがちですね」

それに尽きる。

「厳密に言えば、場所探しが面倒だとか柵を超えるのが面倒だとか後の処理が面倒だとか、迷惑だとか、本当に死ねるのかとかあるわ

けだが……飛び降りって言うのが今時流行らないよな。自殺じゃなくて他殺ならまだしもさ」
「それでもありがちじゃん？　学校の七不思議になっちゃうよ。線路飛び込みは？　これ、一度マルを消してバツにしてあるみたいなんだけど」
「ちょっといぃのを思いついたんだが、やめた」
「なになに？」
「目を輝かせるなよ……」
「うーうちゃんが誤解されるようなコトいーうーなー」
実際はかなりおざなりな相槌だった。説明する気が削がれるじゃねぇかよ。
まぁ、順を追って話してやろう。
「あー。人身事故って、電車が遅れるじゃないか。あれって何だと思う？」
「死体回収するからでしょ。線路の掃除もするのかな。最悪1時間くらい遅れるよねー」
「第一問、一番手っ取り早く電車が復旧する場合を述べよ」
「はぁ？」
卯生は首を傾げる。回答を待たず、続ける。
「第二問、逆に最も復旧に最も時間がかかる場合は？」
「えー。って言うかあたしが回答するのを求めてない問いだよねぇ、それ？」
「ま、そうだ」
「さっさと模範解答を示しなさい」
「あいよ。手っ取り早いのは、飛び込んだ奴が死んでいて、且つ線路の外側に飛ばされてる場合だな」
「なーる。直接線路上で回収作業しなくてもいいから、電車自体はさっさと動かせるんだ」
「そ。逆に時間がかかるのは、バラバラ死体だったり……線路へ落ちて、しかも生きていたりする場合だ。下手に生きてるもんだから、

殺さないように回収しなくちゃいけないんで、慎重さが必要になる」
「あー。しかもそれ、飛び込んだ人は散々だよね。五体満足ではいられないだろうし、何の保証ももらえないだろうし……惨めだわー。……で、それがどう繋がるの？」
「この話を聞いた時に僕が思ったのは、電車に轢かれても死なない場合があるんだな、ってことだよ。あれだけの質量に衝突して、死なないのはあんまりだ。さて、ここで考えてみる。線路へ飛び込んでおきながら、電車に轢かれておきながら、どう言う場合に死なないか――そして、逆にどう言う場合に死ぬか」
一端言葉を切って、コーヒーをかき混ぜる。少しは冷えたかな。
「普通に、当たり所が悪いんだよね。腕だとか、肩が当たって、衝撃を吸収しちゃうんだ」
「そうだろうね。と言うことは、急所へ確実に命中させれば……電車の質量、速度、それらでほぼ確実に、死なせてくれるはず」
「急所って言うと」
卯生は自らのこめかみを人差し指で示す。
「うん。そこさえ――そこだけが電車に命中すれば、問題無い。僕が考えたのは、黄色い線の後ろから飛び込み自殺、って言う奴さ」
「はは、黄色い線の後ろに下がって……ちゅーことね」
「ちょっと面白いだろ。正確には倒れこみ自殺になるのかな。慎重に吟味すれば、綺麗に頭だけ轢いてもらえる。首が飛ぶか、皮一枚繋がるか、それはわからないけれど――まぁ、まず死ぬだろう。しかも一瞬で」
「線の後ろ側に下がっておきながら、死ぬわけ。やるとしてー、吟味にどれくらいかかるかな？」
「三日かけたいね。まず電車の吟味、時間帯の吟味、そして倒れこむ距離の吟味。どれも同じくらい重要だ」
「メジャー持って測るの？　注目されないかなー」
「自分の歩幅使えばいいだろ。部屋の中ででも練習して、後は歩くだけ。簡単な話だ」

「なーる。何でバッにしたの？」
大分飲みやすくなったコーヒーを、一口分口に含む。
「やっぱり電車は止まるだろ。それは迷惑だし……飛び込み自殺もありきたりだ。もう一超え欲しかったんだよね。で、思いつかなかったから、バツ」
「あそ。ここまで来ると、交通事故は確かにバツバツだね」
「死ねるかどうかがまず怪しいからな。向こうが避けてしまったら、どうしようもない。人を轢きたがっている人間に運良く当たればいいが、宝くじみたいなものだよな」
「そこで宝くじに例えるんだ……」
前後（通行人）賞大当たりです。
不謹慎な話だ。
「電信柱に頭を打ち付けてバツ」
「ネタがなくなってきちゃってね。絵的には面白いが、途中でめげそうだ。やり遂げるには、何かしらのクスリが必要になってくるだろう」
「見てみたいけれどねぇ……いや、見たくないか。で、とりあえず終りか」
昨日思いついたのはそれだけだった。我ながら、想像力に乏しいものだ。絵的に面白かったり、ぶっ飛んだ案はいくつか思いついたが、実行に移せるかと言うと怪しいものばかりだった。迷惑をかけず確実に、そして絵に描いたように死ぬ。これが中々難しい。
「土台、死ぬこと自体が迷惑な話だからねー」
言いながら卯生は、ルーズリーフを脇に置き、残り少なくなったラテのカップをくるくる回す。
「ん？　何で死ぬことは迷惑なの？」
「考える前に疑問を口にするなよ。それは……」
コーヒーを飲み干し……おっと、砂糖が溶けきってなかったか、甘い……、カップを戻す。
「周囲が予想してないからだろ」

「一昨日のような昨日があって、昨日のような今日が過ぎて、今日のような明日が来て、そんな一週間が続いて、一ヶ月、一学期、一年、で、成長していくあたしたち——ってことか。誰だって、突然死んじゃうかもしれないのにね。変なの。白樺君、覚えてる？」
「中学の頃の同級生、名前にお似合いな白血病で亡くなった奴。葬式にも出たな。背ぇ高くて、サッカーが好きだったはずだ。覚えてるよ」
亡くなったと聞いた時の、妙な違和感を思い出す。
「妙な違和感。あるいは喪失感か。だけど、白樺君には悪いが、他人にとってはその程度——時間が経っちまえば、そんなものだろ。勿論、遺族の方々や親友の奴等にとってはそんな事無いのかもしれないが……」
しれない、が。驚くほどに、僕の決心は揺らがない。それがなんだって言うんだろう？
変わらず世界は回り、周りの世界は変わらずだ。
「迷惑、って言うのは……そうだな。人生を道に例えてみよう」
「おおう、またもやありがちーな比喩だねぇ」
「ありがちだが、それゆえに比喩として優れてる。人生をカプチーノの泡を掬い取ったスプーンに例えてみよう、とか言われても困るだろが」
「それはそれで一つのお話が始まりそうだけど。で？」
「その上を僕らは歩いているわけだ。ただし、目隠しでね。しかも後ろから常に、圧力を感じつづけてる。横スクロール式のゲーム画面みたいに……タイムリミットが差し迫ってるって感じかな」
「ふぅん。そうすると、おぼつかない足取りながらも、急がなきゃいけないわけね」
「誰しもがそう。だとすると、頼りになるのは今まで歩いてきた足取り——一歩一歩踏み出してきた、歩行の感触だけになるのさ」
ああ、と。卯生は得心言ったような顔をした。カップをくるくる回し続けていた手を止める。

「サイクル。昨日から今日明日へ続く、一歩一歩。今まで一歩進んできたように、私たちはもう一歩を進めているから……そこに、少しの違和感や、ちょっとの異常があると、途惑っちゃうんだね。踏みしめた大地の感触が違うだけで、転びそうになっちゃう」
「僕らの周囲では、人間が当たり前に生きている。今日隣に居た人間は、明日も隣に居るもんだろ。そうやって世界が回って、その感触を頼りに僕らは歩き続けている。だから——知人の死は異常であり、不確かな足場であり、蹴つまづきそうな迷惑な石ころ——と言うわけだ」
「戦時中とか、今戦時中の国とかでは、また違う感覚なのかなぁ」
「迷惑云々の前に、自分の命を守るのに必死だろう」
そんな中、僕は自殺を考えている。けれど、それが命をないがしろにしている事だろうか？　戦時中やら、発展途上国では、常に物資が足りていない。それを先進国が食いつぶしている。僕が一人死ねば、その分物資に余裕が出来て、生きたい人たちへ回すことが出来るのではないか。そう考えてみれば、僕がやろうとしているのは愚かしい行為ではなく、他者を救うための誉められるべき自己犠牲なのかもしれない。
と、そんな事を言ってみた。
「んなわけないじゃん」
失笑した後、ラテを飲み干して卯生が続ける。
「単純な足し算引き算で言えば、あたしたちがちゃんと生きて、発展途上国の人々を救ったり、戦争をやめさせたりする方法や発明を考えた方が、ずっとたくさんの人を救えるよ。そうじゃなくても、ちゃんと稼いで募金すれば良いだけの話じゃん」
「反論の余地も無いな」
その程度の事、しっかりわかっている。僕は余裕ある自殺者だ。
それらの言葉の連なりが口先だけである事も、わかっている。
「…………」
「……んー……」

お互い飲み物も飲み干して、良いアイデアも出ず、無言のまま時間が過ぎる。たまにうめき声を上げるくらいだ。うーとかんーとかむーとかにぬーとか。三人寄れば文殊の智慧と言うが、文殊様は自殺のアイデアなんか出してくれないだろうし、そもそも三人には一人足りない。もう一人増やすわけにもいかないしな。

半ばぼうっとしていた所で、卯生が溜息のように言葉を漏らした。

「あたしも死んじゃおうかな」

「……、はぁ？」

思わず呆れたような声になる。最初は自殺法かと思ったが、そうではないらしい。言葉だけの意味。しかし、脈絡が在るような、無いような、判断に困る発言だった。と言うか対応に困る。普段からいつでも元気ハツラツムスメが、死んじゃおうなどと、似合わない。顔を覗き込むと、微妙な表情をしていた。笑顔ではなく、笑おうとしている顔。笑えない。

「何をいきなり」

「うーん。最近さぁ……せーせと上手く行ってないんだよねー」

「渡砂と？」

渡砂(わたりずな)瀬々斗(せせと)。

保呂羽卯生の彼氏——つまりは恋人であり、学校は同じで、クラスは違う。僕らはC組で、渡砂はA組だ。ランクでクラス分けされているわけでは無いので、これは向かいに位置したクラスではないという意味しか持たない。

渡砂は卯生と釣り合っている人間だと、他人からは評価できる。釣鐘と提灯ではないわけだ。勉強も出来るらしいし、運動でも他人に引けを取らない。何より顔の造形と体形が良い。運動で言うのなら、他人に引けを取らないどころか、スポーツしている姿がパフォーマンスになるほどだ。下手をすると女子がキャーキャー言いそう（実際にそんな事は無い。それが起こるのは、漫画の世界くらいだ）なくらい、格好良い。そして父親が政治家だ。セージカと言うと鹿の一種みたいだが……そんなジョークは負け惜しみも良い所だろう。

つまり、お家柄も悪くないわけだ。
さて、そんな渡砂との関係が——言うなれば恋人関係が、上手く行ってないらしい。
「うん。上手く行ってないんだー」
にへへ、とわざとらしく笑顔を作って、卯生が言う。
「その程度で死のうとするなよ」
「すっげぇ白々しい台詞を真顔で言わないでよ」
「わざとらしい笑顔で台詞を言われるよりましだぜ」
「………………」
「幼馴染だろうが」
卯生は、笑顔を消した。目線を泳がせ、口先を尖らせたままで話し始める。
「せーせってば、あたしのことを必要だって、言うんだよね。俺にはお前の存在が必要だって。綺麗な関係じゃない。言外に、俺を支えてくれって言ってるのがありありとわかる言い方だった。枕になってくれって言うか、もっと悪く言えば、踏み台にさせてくれって言うか。おとーさんのこととか、理想に届かない成績とか、自分の進路とか、色々悩んでるらしいけれどさ……。それは、悩んでるのわかるよ？　出来ることなら力になってあげたいとも、思うけれど。そんな風に一方的に必要にされても、あたしとしては困るんだ……助けアイとか頼りアイって言うより、もたれアイって言うか……。こっちはそんなカンケー、求めてない」
支離滅裂だぜ。
幼馴染のよしみ、解決できる問題だったら解決してやりたいところだが……いかんせん、僕には経験不足だ。何でこんな話になったんだろうなーと思いつつ、長々として、だらだらとした、愚痴のような話を延々と聞き続ける。その後、いい加減良いだろうと言う所で、僕は口を開いた。
「いや、けどさ。彼女居ない暦イコール年齢の僕としては、その悩みを解決出来ないんじゃないかと思う」

「嘘」
「おぅ？　え、倦怠期とかじゃ？　えっと、無理だって」
「ううん。彼女居ない暦イコール年齢じゃないっしょ」
「は？」
ちょっとムキになったように、卯生が訂正した。ちょっと待て……何を言い出すんだ。知らない間に僕に彼女が出来ていたのか？　脳内彼女か？　そこまで病んでないぞ？　あるいは記憶喪失か？　僕ってそんな美味しい役どころだったか？
ハテナマークが頭上に浮かびまくる僕に、コイツは言う。
「付き合ってるじゃん。一度。あたしと」
「……ああ。って、おい。小二だぜ！？　数に入れるのか！？」
「入れるもん」
「もんじゃねぇよ。それにしたってお前……七・八歳……？　九年も前じゃねぇかよ」
「あたしは覚えてるからねー。ファーストキス奪ってったじゃーん。ちゅっちゅっちゅって」
「ちゅっちゅ、でもねぇよ！　高校生になってそんな恥ずかしいオノマトペはねぇよ！　ってかファーストだったのか……僕のファーストはお母さんとだぜ……？」
「きーきってドーテー？　だよね？」
「どさくさにまぎれて何を聞いてやがる。しかも念を押すな！　そうだよ、察しろ！」
畜生。てめぇはどうなんだ、てめぇは。
「あたしも処女だし」
処女なんですか！？　潔白ですか！
「何ならあげよーか。童貞のまま自殺しちゃうのも、処女のまま死んじゃうのも、負け犬っぽくって嫌だもんね……」
しかもくれるのか！？　自殺を選んで良かったよ！
ふっとか、悟った女の目で俯き勝ちにこっち見てるよ！
幼馴染ルートにこんなドッキリが！？　落ち着け！　絶対オチが

付く！
「ま、嘘だけどね」
「やっぱりな！」
「せーせにもうあげちゃったよー」
「だろうと思ったぜ！」
く、女に泣かされそうになってる！　それこそ小学校以来だぜ！
「しかも、ナマで中出し経験もあるぜ」
「ちくしょー！　……って、おいおい。それはやばいんじゃないのか？　ハランだりしたらまずいだろ」
「うん。妊娠するかなーって思ったけれど、しなかった」
舌を軽く出す卯生。
ここまでオチが付くのか。
お互い変なテンションから、回復しつつあった。
「ふーん……」
「勿論、この年齢で子供が欲しかったわけじゃないよ。デキちゃったら困ったとは思う。けれど、どうにかなったとも思うね。それを乗り越えられるくらいには、せーせを愛してるし。人生のスリルだよ。スパイスだよ。ギャンブル、かな」
「ギャンブルね」
さっきの例に例えるのなら、今までに無い方向へ足を踏み出してみたかった、って感じか。
わからないでもない。わからないでもなく、だからこそ。
「だからこそ、か」
「だからこそ、だね。踏みつけるような言い方されたのが、嫌でさー。綻びができちゃったら、脆いもんだね。そもそも、そう言うギャンブルに手を出しちゃってる時点で、あたしは——」
保呂羽卯生は。
ある意味、幼馴染以上に理解者だった。
「だから、止める資格や権利が無いとか、一緒に自殺案を考えるとか、言ったのか」

「かもね」

「言っておくが……」

ちょっと大きめに息を吐いて、吸って。

「最初には死ぬなよ。てめぇ」

「あ、自殺する事自体は止めないんだ」

「こっちにこそ、止める資格も権利も無いだろ。理由も無い」

死人に口なしだ。自分で言うのもなんだけれどね。

「けれど、考えろよ。考えて、考えろ。考えないで死ぬのは、惨めだ」

「――ん。あんがと」

目を瞑って、噛み締めるようにはにかむように、僕の幼馴染兼共謀者は頷いた。

僕は鞄を持って、席を立つ。

悩んでいるうちに、あるいは雑談をしているうちに、結構な時間が経っていた。

「今日はこれで帰るか」

「明日はビブの日？」

「土曜だから、そうだな。ついでに掃除当番だ」

「じゃ、明日は言わないで置いてあげよう」

「……さんきゅ」

誰にかは、訊くまでも無い。

美術部員は二名しか居ないのだ。

卯生も立ち上がったところで、ちょっと尋ねてみた。

「ん？　天文部の活動日は？」

「まんでーふらいでー」

「活動しろよ幽霊部員」

「『幽霊部』員に言われたとぉないですわ」

「は、自殺は僕らにお似合いだぜ」

皮肉げにそう言って、喫茶店を後にした。

あくまで日常の延長線上で、今日と同じように、明日も一歩を踏

み出すのだろう。
今のところは。

二頁目

一週間と五日前。

　この学校に美術部なんてモノは、もはや存在しない。
　昔は在ったらしいのだが、僕らの学年が入学した頃には既に、漫画研究部の実践派達と合併した後だった。所属したことは無いから詳しくは知らないが、少なくともこの高校の漫画研究部には、大きく分けて二つのタイプが居たらしい。つまり、観賞専門派と、実践専門派。漫画やアニメを観賞してそれに関しての議論を楽しむ奴らと、自分で漫画を描いてみたい奴らと言う事だ。当然前者の方が割合は大きく、実践派は肩身の狭い思いをしていたわけで……時流に乗っ取って廃部寸前だった美術部の人間と相談の末、共に新しい部活を立ち上げようとなったわけだ。
　そんなこんなで、観賞専門の奴等は漫画研究部に、絵を描く奴等はまとめて描画部（そんな名前だったはずだ）に、所属する事となった。美術部と言う名前は立ち消えたのである。
　消えた。
　立ち消えた、はずなのに、美術部所属を名乗る人間が今この学校に、二名ほど居る。
　そのうち一名はあまり乗り気ではなく、ただ単に周囲そう言われているだけで、自分から美術部員である事を主張したことなどほとんどないのだが、学校と言う閉鎖空間に於いての変わり者は自然と目立ってしまうもので、なんと言うか、まぁ、仕方がない話だ。要するに、一人は僕である。
　ところで今日は土曜日で、その美術部の活動日となっている日である。土曜の授業は四限まで、つまり午前授業なので、午後は部活の闊歩する遊歩道たる有様だ。食堂で昼食を食べ終え、僕は美術室へと向かった。

予想通りそこには既に一人の生徒が居たので、挨拶をする。挨拶くらいは当然のようにこなす、模範的な人間関係だ。

「おはろ」

「♪♪♪、♪」

鼻歌が返って来た。無視かよ。

伴奏を終えて、そのまま歌詞に入る。

「ピカーソダケリ、トービデボン♪　アダーマノナカ、プーワプカリン♪　ギ・ク・シャ・ク・ホ・ダ・ラ！　ケセラーセラヴィ、ビビデボン♪」

「………」

しかもすげぇ歌歌ってやがる。明らかにマイナー嗜好なチョイスだ。

コイツは口を動かしながらの方が作業に集中できるタイプのようで、部活動の最中、始めから終わりまでずっと喋っている事もざらにある。一人で賑やかな奴なのだ。

毬雲（まりぐも）雛鳴（ひなな）。

二年E組の変わり者。と言うより、学年全体で……もしかしたら学校全体ですら、一位二位を争うほどの、変人だ。二つ名すらある。『ブービー・ヒナナ』。因みに、卯生は『ななちゃん』と呼んでいる。卯生は顔の広い良い奴なので、変人の毬雲とも分け隔てなく接しているのだ。

そして、現在の美術部創始者こそが、毬雲雛鳴だ。

美術部が無いはずの学校で「私は美術部だ」と豪語し、正式な手続きすら済ませず、ごり押しのように放課後の美術室を借りている。そもそも、部活には五人以上の部員と顧問の先生が必要なのに、だ。『幽霊部員』ならぬ、『幽霊部』たる由縁である。

『ブービー・ヒナナ』。

成績が常に最下位だからと言うわけではなく（しかし、最後尾群の中にはいるらしい）、美術部を略してビブ、さらに逆さにしてブービーと言うわけだ。それと一年の最初の中間試験で、（進学校に

はあるまじき事に）数学で見事十七点を取った事も関係している。名前と見事に合致する点数もさることながら、毬雲は解答用紙に絵を描いて提出した事が大きい。端っこの落書きなどでは無い、大きな絵を。まるで解答の方がついでであると言わんばかりに。

まるで、学校の授業の方がついでであると、言わんばかりに。

しかもその絵が、舌を巻くほど上手な絵だったのだと言うから、性質が悪い。先生も対応に困ったろうし、生徒たちの間では噂になった。噂の的になった彼女は、当然のように一言、「だって私、ビブだもン」と対応した。これがまた非日常を求める生徒たちに受けたのだろう、噂はさらに熱を帯び、結局あの酔狂な二つ名に落ち着いた。

紛う事なく、変な奴だ。

「……ビンブルパペ・ピポ、プペポピー！　おはろー」

一曲歌い終えて、やっと挨拶を返してきた。

って言うか歌詞、丸暗記してるんだな。

「おはろ……」

返事に返事をするのはおかしいかもしれないが、なんとなくそう応じてしまった。

毬雲はそんな僕に構う事無く、カンバスに筆を振るっている。今日使っているのは、アクリル絵の具（水彩絵の具のようなもの）のようだ。絵に関してはオールマイティらしく、鉛筆も色鉛筆も、ミリペンもコンテも、水彩画も油絵も、たまにペンキまで使って、好きなように絵を描く。

僕も自分の絵を描くべく、用意を始める。

毬雲が一曲歌っている間に荷物は片付けていたので、道具を出す。旧美術部室をそのまま、現在の幽霊美術部は使わせてもらっている。あらかたの備品は描画部に持っていかれているし、部費で何か買おうにもそもそもの部費が無いので、置いてあるのはあまり物と僕らの私物だけ。幽霊美術部は毬雲の妄言なので、予算が下りるはずが無いのだ。それでも物置として使わせてくれるだけ、先生方はおや

さしいのだろう。
　適当に席を決め、バケツに水を汲む。
　毬雲と違い、僕は基本的に水彩画くらいしか描かない。水彩画というと聞こえが良いが、要は小学校やら中学校やらで使った絵の具の残りを、そのまま使い潰しているだけだ。道具だってそうである。擦れてはいるが、平仮名できちんと『みずときせき』とバケツに書いてあるのだ。流石におおっぴらに持ち歩くのは恥ずかしいので、バッグは買い直したが。
　席に着き、紙を広げた所で。
「軌跡くんは、食堂で昼食を食べてきたンです？」
　カンバスの向こう側から、顔の見えない毬雲が話し掛けてきた。
　相変わらず、『ん』の発音が特徴的だ。舌足らずなちっちゃい子みたいな。
「ん？　ああ」
　正しい……と言うか、一般的な発音で応じる。
「混ンでたでしょう」
「まぁ、混んでいると言えば混んでいたが……食堂を昼に利用しようとするのなら、あんなものだろう。大体の生徒は昼にしか利用しないんだから、しょうがないさ。土曜だし、普段よりは空いてたかな」
「ふーン」
　筆を取り出し、バケツの水へ浸す。パレットに赤絵の具を出し、ちゃかちゃかとそれを溶き、また水に筆を浸した。じわり、と、赤が広がる。
　ああ――そう言えば、リストカットは痛いとか聞いた事があるな。
　痛みと言うのは厄介だ。痛みそのものは別にしても、それは途中で自殺を断念する理由に、大きく繋がる。つまり、確実性が揺らぐのだ。……どうだろう、酒でも飲んである程度朦朧としていれば、大丈夫か？
　というか、自殺のことを考えていること自体が、大丈夫かって感

じだが。
「……ま、どちらにしろカッコ悪いか」
「何か言ったー？」
「いや、なんも」
「何か言いましたよー。何かな、何かな」
「えーと……、毬雲さんはきちんとお昼食べましたか？」
話題をでっち上げてみた。中途半端な敬語は、毬雲直伝だ。
「えっとー、ンとねー。食べ」
「…………、？」
「ましたよー」
途中で切るな。
「チョコラスクを食べました。あと、カフェオーレ。おいしかったよ」
「ラスクって言うと、小さい食パンみたいな菓子パンか。クッキーみたいな」
「うン。ひとパック七十円で、三枚も入っててお得ですー。カフェオーレも、５００ｍｌが九十円で、たっぷりです」
「合わせてなんと百六十円！」
「今なら軌跡くンストラップもついてきちゃう！」
「ゴミつけてどうするんだよ」
「今なら雛鳴ちゃンストラップもつい」
「ゴミつけてどうするんだよ」
途中で切った。
「……て、こない！」
めげない子だった。
まぁ、コイツの場合……加減がわからないんだよな。楽しそうに笑っていたかと思うと、よくわからないラインを超えた途端、泣き始める。同じ年齢か疑わしい。背も小さいしな。１５０ｃｍには、確実に到達していないだろう。笑っているうちにギャグを終らせるのが、一番良い。

「お金ないなら貸すぜ。それともダイエット中？」
「ううン。ダイジェスト中」
「消化中か……わかりづらいな」
「朝ご飯がしっかりしてたから、お腹空いてないンです」
「ああ、そう」
適当に会話を進めながら、赤い線が散在した紙に、新たに赤く線を引く。他の色がそろそろ欲しくなってきた所だ。
筆を水の中に浸して――ぷくんと泡が立つ――ふと思いつく。そうだ、溺死系についてあまり考えていなかったな。風呂は安直……川に飛び込んだらどうだろう？　見つかるとまずいか……と言うか、どうせ飛び込むのなら綺麗な川がいいが、綺麗な川が思い至らない……あまり生活圏から離れてしまうのも、『日常の中の死』を演出できなくて、嫌だしな。
そう、案外重要なポイントだ。
あまりに生活圏から離れた所で自殺してしまうと、それはただの人間の死になってしまいかねない。水梳軌跡ではなく、別の人間が死んでしまった気になるのだ。水梳軌跡は死んだのではなく、どこか遠い場所へ隠遁してしまったかのように、映るだろう。
山の中入ってリフレッシュしちゃって自殺する気を失っちゃっても、初志貫徹ならずだしな。一度始めたことはきちんと最後までやれと、誰もが言うのだ。
大体、卯生を巻き込んでしまった（向こうから飛び込んできた感もあるが）時点で、一抜けたは許されないだろう。何より自分が許さない。そのオチは、あまりに詰まらないからね。
「出来た！」
「お」
などと考えている内に、毬雲が絵を描き終えたらしい。
ブービーヒナナこと毬雲雛鳴について特筆すべきなのは、使う画材の幅広さではなく、その描画速度だ。テスト中の落書き伝説からも、それがわかる。口を動かしながら、手も動かす。雑だったり、

所作がスピーディなのではない。
描画中、彼女は悩まないのだ。
およそ万人が絵を描く時に、誰もが時間を取るであろう――「どんな構図にしようか？」「どんなものを描き込もうか？」「どんな色を使おうか？」または「やってみたら思ったほど良くない」――と言う悩み、思考時間。毬雲は、それがほとんど無いのだ。ゼロに近い。確定的、確信的に、筆を運び、線を引き、色を塗る。そして描き直さず、不必要な重ね塗りはしない。
初めから、彼女の頭の中に明確すぎるイメージ、ビジョンが在るのだろうと、僕は思う。
使用する画材の幅が広いのは、それを表現するのに適当なものを使っているだけなのだ。
「見て見て、軌跡くン」
「おお」
がたん、と席を立って、毬雲の絵が見えるところへ移動する。
毬雲の脳内に明確な絵が最初から在るのだろう、と予測する理由が、もう一つある。他人が描いている絵についてやたら口出しするのだ。「ここは黄色ですよ！」「うウン、もう少し下だね」「そこから左端まで、弧を描くようにラインを」云々……。他人の絵を見ながら、止まることなく途惑うことなく、明確な指示――もはや命令であるかのように、口出ししてくるのだ。
はっきり言って言うまでもなく、うざい。
だから、彼女と同じ空間で絵を描く時は、毬雲の目に自分の絵が入らないよう、離れて描くのだ。
「見て見て」
「見る見る」
楽しそうに絵を示す毬雲の後ろから、絵を覗きこむ。
なんと言うか、どこかで見たような、よくある感じの絵だった。
淡く藍色から黒へのグラデーション。満天の星空。きらめく水面に、同心円を描く波紋。今にも飛び立ちそうな、翼のある白馬――

いわゆるペガサスだ。ペガサスに角があったりするが、ユニコーンとの配合種だろうか、これは。しかしそれにしても、あれだ。
「少女漫画っぽいでしょう」
「うん、ぽいな」
「ンへへー」
垂れ目を細め、長いストレートの髪を揺らして……けれど、ちょっと意地悪そうに笑う。頼んでもいないのに、毬雲は解説を始めた。いつものことだ。
「星空は希望を示しているンですね。水面は自分を映す鏡。そこから今、まさに飛び立つ――つまり乖離しようとしてるのが、お馬さン」
「馬ねぇ……馬って言うのは？」
「馬って言うのは、人が背中に乗るためのものでしょ。ここに」
毬雲は、馬の背中の辺りを示す。
「自分が乗るンです。角と白は純潔の証、翼は夢へ飛び立つためのもの。要するに――現実の自分から離れて、希望溢れる夢の世界へ連れてって下さいって言う、絵なンだね」
「なんか幼稚だな」
「幼稚だよ」
「夢みる乙女ってか」
「少女漫画だもン」
実際、現実逃避と言わんばかりのイメージだ。こう言う絵が好きだって人たちは、それを自覚して描いたり、読んだりしているんだろうか？　気付いていても、気付いていなくても、ある程度の年齢を超えていたら、それは、なんだか心寒いお話だ。
ところで、毬雲がそんなタイプかというと、そうでもない。少なくとも僕の印象では。
なので訊いてみた。
「でも、毬雲らしくない絵だよね」
「ン。で、私はこれなのです」

指差した所には、月が描いてあった。
よく見ると、変な月だ。三日月――この絵に月を描くのなら、満月じゃないか？――それも、下向きに弧を描いている、上弦の三日月だ。高い位置にあるくせに。
ああ、と僕は言った。
「笑ってるのか」
「うン。そんな光景を、高い位置から嘲笑ってるのが私。別に私じゃなくてもいいンだけどね、少なくとも『コンな絵』――思想を、嘲笑ってる奴が確かにいるンだよ、と言うことです」
「成る程ね」
そう。
ちまっこい容姿に反して、コイツの腹の内は結構えげつないのだ。捻くれている、と言うか。可愛らしく、勉強も運動も出来ず、庇護欲を誘われそうな奴なのに……、今一つ好かれる事が少ないのは、そう言う理由がある。
「しかし、それを差し引いても」
「どれ？」
無視。
「上手い絵だな。はっきり言って、僕はプロと見分けがつかないよ。美術の世界にはプロが幅広く存在するから、どれと比べるんだって感じだが……まぁ、そこらのイラストレーターよりは上手いと思うぜ」
「ふーン」
「美大にでも行ったらどうだ？」
「い」
口をそのままにして、毬雲は黙ってしまった。
ぶっちゃけた話勉強にもろくすっぽ興味が無さそうで、絵ばっかかいてるコイツは、そっちの方面へ進むんだろうと僕は漠然と思っていた。毬雲を知る他の人間もそうだろう。昨日の話ではないが、突然殺されたり、あるいはまさかの自殺をしない限り、毬雲の将来

は美術方面だ。実力については問題無いはずだし。

さて。

絵も観賞し終わったことだし、解説文も聞いた。毬雲はカンバスを持って部室へ行ってしまった（多分乾かしに）ので、僕は席に戻った。

絵の続きに取りかかる。僕は口を動かさなくても、筆を動かすことができるのだ。淡々と塗る。

道に例えた人生だが、絵に例える事も出来るだろう。僕らは『自分』と言う絵を描き続けているわけだ。与えられた道具は人によって違い、カンバスの広ささえ人によって違う。新たに道具を仕入れることも可能だが、それには労力が伴う。何にせよ、大抵の人間はその白紙へ特に意図も込めず、構図に悩んだり色に悩んだりしながら、休むことなく筆を滑らせ続けるのだ。思考↓水↓絵の具↓紙↓思考……の、ルーチンワーク、ライフサイクル。かくして、その人間が死んだ時に絵は完成する。

完成する、のだ。させるのではない。絵を描くことに終わりは無い。

実際のどんな絵も、終わることは無い。満足が行った所で筆を置くだけで、その後も描き足されたりアレンジされたりと、何かしら手を加える余地が残されている。それはあらゆる芸術活動において言えること、だろうけれど。毬雲のように『出来た』と確信をもって宣言できる絵は、案外稀有なものかもしれない。

ここでまた、自殺について考えてみるのなら――僕の表現した、『絵に描いたように』と言う比喩がまた面白い。ある種の満足が行った所で、自ら筆を置き、絵を完成したことにするのだ。それ以上自分が余計なものを描き足さないうちに、終わらせておくのだ。まぁ、いくら完成させたところで、他人は他人の死を飾るのが好きだし得意なわけで……結局世に出る頃には、生き残った人間たちが死人のカンバスへ色々描き込み、適度に適当な具合に『自分』は彩られているのだろう。

ん……？
ちょっと違和感——と言うか発想の欠片を掴んだ気がして、僕は筆を休めた。宙を見つめ、何が引っかかったのかを探る——と。
「かないよ」
「……あ？」
毬雲が戻ってきていた。
新しいカンバスを持ち出してきて、それを設置している。まだ描くのか……飽きない奴だな。
かないよってなんだ。
「いかないよ」
「……ああ。長い間を空けたもんだな……。僕なんかその時間で、人生観を一つ習得しちゃったくらいだよ。——って、ええ？」
美大に行くんじゃないのか。
「フツーの大学へ行きますよ、私は」
「そうなんだ。絵は生業にしないのか。てっきりそうするもんだと、僕は思ってたけれど」
「なりわいって、何？」
「おシゴトって意味」
つーか、高校二年……しかも紛いなりにも進学校の高二やってんだから、このくらいの言葉の意味は知っておけよ。そ知らぬ顔で、早速絵の具を溶き始めてるしな……コイツ、確か使う絵の具の量も、最初から確信的に決めてやがるんだよ。それだけの才能をもって、何故それを使おうとしない。
「おシゴトにはしませンよ。だって仕事にしちゃったら、真面目にやらなきゃいけないでしょう」
「真面目に描いてるわけじゃないのか」
「真面目には描いてないよ。素朴に単純に描いてるだけです」
「ふーん……。それじゃ、何になるんだ？」
「わかンない。カウンセラーとか面白そうです、ですー」
お前には無理だ。

「お前には無理だ」
「口に出さなくてもいいじゃないですかぁ。ンン、わかンないけど、絵の方はお小遣い稼ぎ止まりだね」
「そっか」
偉くまた、確実そうにそう言ってのける。まぁ、趣味は趣味、仕事は仕事、か。そう言う考え方も、いいかもしれない。きっと毬雲のことだ。そのうちどこかで悟ったように、自分の仕事も決定するのだろう。
将来のビジョンなんて話なら、僕の方がよほど不安かもしれない。自殺しようとしているんだからね、かっこ笑い。
「そうなんですーですーですですすー」
「なんだよ」
「ですです言えば、さっき卯生ちゃンが来ましたよ」
「なん……ん？　卯生が？」
もしかして自殺プランのことを毬雲に話しに来たのか今日は言わないって言ってたじゃねぇか、と、少し焦った。けれど。ちょっと冷静になってみれば、それにしては毬雲の様子はいつも通りなので、そうではなかったのだろう。
「うン。お昼の時間帯に、美術室をちらって覗いて、ヴィーとやってったのです」
「ヴィー？」
「ヴィー」
毬雲はカンバスの影から右手を出して、筆を持ったままブイサインを作って見せる。
「……それだけ？」
「それだけー。軌跡くンは居ないよって言ったら、あ。軌跡くンは居ませんよって言っ……いましたら、別にアイツに用があったわけじゃありま……あったわけじゃないよって、ご退場なさいました」
「その変な敬語をやめろ」
「ンへへへー」

笑ってんじゃねぇよ、変人。妙に中途半端な奴め。狙ってんのか？
しかし、あまり突っ込んでも仕方がない。卯生はただ単に、暇だから覗きに来ただけなのだろう。ややこしいことをする奴だな……不必要に気を強張らせてしまった。
そんなこんなで。
この日は、他愛も無く毬雲と雑談をしながら絵を描いて、終った。
発想の欠片は、行方不明のままだった。

▼　▼　▼

一週間と四日前。

日曜日である。
従って、ごろごろとしながら過ごしてみた。
ネットにわざと稚拙な書き込みをして、誹謗中傷を受けることも忘れない。履歴はきちんと残しておかないとな。死ね死ね死ねと、元気な方々もいらっしゃることで。言われなくてもこちとらその方法を模索中だっての。
夕方から夜へ気持ちも切り替わる頃、卯生からメールが届いた。
タイトルは無し、内容は一言、「んー」とだけ。
わけがわからない。毬雲ならまだしも、卯生のこう言う行動は珍しい。ので。
無題のまま返信、内容は一言、「んー？」とだけ。
書いて送った。
返信はその日、来なかった。

三頁目

一週間と三日前。

懲りる様子も見せず、また一週間が始まった。
目覚し時計を止めて、しばらく停滞。その後起床。
制服に袖を通し、食卓に着く。母の用意した朝食は簡素なものだが、不味くはないし――何より朝食を用意してくれていると言うだけで、感謝に値する。感涙のあまり視界がぼやけるほどだ……なんて、眠いだけだが。
野菜ジュースを飲み干した。
食べ始めた所で、父親は会社へと出勤していった。ニュースを映すテレビで時間を確認すれば、僕もあと二十分の内には出かける必要がある。
昨夜のおかずの残りが多い。
卯生やら渡砂やら毬雲やら、他人についてばかり意見しているのも不公平なので、翻って見て自分はどうなのかと考えてみる。僕が育った家庭は良くある両親共働きの家庭で、両親ともそれなりの教養と学歴を持ち、健全な教育を僕に施し、健全な教育を受けられるだけの教育費を提供してくれている。一人っ子である僕に、しかし重荷となるほどの期待をするわけでもなく、かなり好きなように生きられるだけの自由を許してくれている。家庭内での会話も途絶えず、夫婦喧嘩を何度か見てはいるが離婚するほどでもなく、仲睦まじい良い家庭なのだ。
だから、もし僕が異常だったとしても、それは両親や家庭のせいではない。
僕が自殺したとしても、それは僕の責任であって、両親は余計な心を砕く必要などないのだ。
箸を置いた。

「ごちそーさま」
「はーい。後五分よー」
「うぃーす」
顔を洗い、口を漱ぎ、キシリトールのガムを噛み締めて、バッグに教科書を放り込み、靴を履いて、包み紙でガムを包み、ゴミ箱へ捨て、玄関のドアを開ける。
「はっしれー」
「いてきま」
「いてきな」
後少ししたら母親も家を出るはずで、慌しい毎日である。
変わり映えのない朝の空気を吸い込んだ。

＊　＊　＊

のんびりと一日が過ぎてゆく。当然のように、保呂羽卯生は出席していた。昨日のメールについて聞いてみようかとも思ったが、それほどのことでもないだろうと思い直し、やめておいた。いくら幼馴染と言っても、もはや他人同士。同じクラスとは言え、席が近いわけでもないし、きっかけの無い話題で盛り上がるほどの友人でもないわけだ。何より男子女子だし、活動圏が微妙に違う。
二限と三限の間。
二限の英語（会話）が早めに終わり、別段急ぐでもなく教室へ向かって歩いていた。会話の授業は別教室なのだ。と……、Ａ組の渡砂が視界に入った。
何をするでもなく人の目を引く奴ってのはいるもので、渡砂瀬々斗も間違いなくその素質を持つ一人だろう。一般人とどこが違うのかはわからないが、こう、視界に入ると思わず視線を向けたくなってしまう。カリスマ、とは違うか……役者体質、芸能人体質？　政治家の息子だからだろうか。どれにしたって、僕には備わっていない素質である。

にしても、一人で歩いてるな。彼は友人連中に囲まれていることが多いってのに。A組みの授業は終ったのか？　そもそもなんで廊下をうろついて……あ、まずいぞ、こっちに気付きやがった。

二限終了のチャイムが鳴った。

「よ。卯生の幼馴染君じゃないか」

話し掛けられた。だから僕はアイツの付属品でもなんでもない。

「どーも」

「悪いな。あんな良い奴の彼氏をやらせてもらっててよ」

人懐っこい感じの笑みを浮かべてくる。

何で話題が卯生中心で、しかもそう言う方面なんだ……と思ったが、よくよく考えてみれば僕はアイツに振られたばっかりだった。当の恋人である渡砂が、その出来事を知らないはずがないので……これは一種の気遣いと言う奴だろう。

ならつまり、こちらもそれらしい対応をするべきか。

「いや……。まぁ、確かに僕なんかじゃ釣り合わないだろうしね。取り立てて取り得の無い僕より、渡砂の方がずっと保呂羽に相応しい。精々アイツを幸せにしてやってくれ」

「おい、拗ねるなよ」

渡砂はそう失笑した。しかしそれから、ちょっと考えるようにして繋げる。

「つっても……、卯生は可愛いし、優しいし、さっぱりしてるし、頭も良いし、明るいし……惚れるのもわかるな。俺が言うべきことじゃ、ないか。幼馴染君の言う通り、精々頑張らせてもらうな」

「……呼び方戻してくれないか？」

「おっと。悪いな、水梳」

周囲を生徒の集団が通過してゆく。

しばしの、両者沈黙。人の波が途切れた所で、渡砂は言葉を続けた。

「——最近、有名人だよな」

「僕が？」

「お前がだよ。水梳軌跡君」
「……噂の的になってるだけじゃないか。恥の上塗りに次ぐ上塗り。下地の色が何色だったかなんて、もはや推測すらつかない。笑いたければ笑えば？　僕は気にしないぜ」
「だから拗ねんなって」
ぱんぱんと肩を叩かれる。馴れ馴れしいと言うか……僕は真似できないコミュニケーションだよな本当。……なんて考えていたら、若干顔を近づけて渡砂は言った。
斬り込むように。
「何か企んでるんだろ」
「――、いや……」
何……？
反応に一瞬詰まる。
「上手くやってると思うぜ、水梳は。多分ほとんどの生徒が――お前が『わざと』恥の上塗りをしていることに気付いてない」
「………」
渡砂を睨むようにする――が、無駄だ。自分の理論に自分で納得しきっている顔だ。卯生から聞いたのか……？　いや、上手く行ってないといってたし……。それも嘘……ではないだろうな、あそこであの嘘をつく意味が不明だ。
なら、自分で気付いた……のか。
「誰にも言わねーよ。言ったところで俺に利益は無いわけだし、信用してくれ。あ、勿論ゆすったりするつもりも無いからな」
冗談めいて、そう言う。
確認――して、おくか。
「……どうして気付いた？」
「面白ぇな、サスペンスドラマみてー。俺、結構ああ言うの好きなんだぜ。ま………何となくだよ。ここでもう一回拗ねられたら、はいそうですかごめんなさいで済んでた話だ」
「何となく？」

「……お前が学校休んでないからだよ」
「――あー」
成る程。そこは気付いてしまえば、不自然に見えるところだ。
「これだけ恥かいてりゃ、不登校にもなりそうなもんだ。そうじゃなくても、休みがちになるくらいが自然だろ？　精神的に追い詰められるだけで、人間体調壊すんだから」
「体調が悪くて、精神的にも負い目があったら、簡単に登校を諦める……か。にしては、僕は健康的過ぎるってこと」
「ああ。つまり、恥をかいたとして、それを苦にしてねーんだろ」
「それは何かしら別の狙いが在るだろうから、ね。はぁん……なーる」
コイツは名探偵か。
だとしたら僕は、罪を認めて膝を折り、両手を床につかなきゃいけないのか？
「だからって他人に言うつもりも、ましてや理由を聞くつもりもねーから、安心しとけって。目に付いたから声をかけただけ。俺みたいに気付く奴もいるかも知れないから、気ぃつけとけよーって」
「どうかな……。渡砂みたいに勘が良い奴がたくさんいられるのも」
「俺を買いかぶるなよ」
遮るように。
ここで何故か、名探偵役であるはずの渡砂瀬々斗の方が――歪んだ顔を見せた。……何だろう？　卯生と上手く行っていないのに関係が……あるのだろうか。人懐っこい笑顔に、爽やかな立ち振る舞い、優れた洞察力、他人に深入りしない気遣い。勘だけじゃなく、良い奴じゃないか。
と。三限開始のチャイムが不意をつくように響いた。
「おっと」
見渡せば、歩いている生徒もほとんどいない。
「お。悪いな、引き止めちまって。じゃ――またな」
「……ああ、うん」

さっと手を振って、A組教室へ向かう渡砂。
僕もC組教室へと急ぐ。
のんびりしていたところを、横から突然轢かれた気分だ。油断ならない。
ただまー……、不登校はしづらいところがあるんだよな。両親に怪しまれる、つまりは警戒されてしまうと、選択できる自殺の幅が狭くなるからだ。方法を早いところ見つけてしまわないと、いけないってことか。そうだな……ぼろぼろ休む、くらいはし始めておいて良いかもしれない。
渡砂の助言（？）を反芻しつつ、先生の居ないざわめく教室の中、席に着いた。
次は数学か。

＊　＊　＊

他に特筆することも無く、その日は終る。
卯生は放課後何処かへ行ってしまったし、部活も無かった。
そう思っていたら、メールが来ていた。卯生からだ。またもや無題。昨日のメールについて何かしらの説明でもされてるのかと思ったが、違った。しかし簡潔に、また、一言だけ。
「泣いてたよ」
……か。
誰がもどうしてかも訊く必要は無い。携帯電話をベッドへ放る。
明日早速休むかどうするかを考えて、結論を出した。

▼　▼　▼

一週間と二日前。

「地球温暖化、進む砂漠化、オゾン層の崩壊、海の汚染に大気汚染、肥大するゴミの処理問題に人口増加による食糧問題。将来への不安。不況に陥る経済界、高騰する物価、保証の無い雇用、明日をも知れない職場、不信の溢れる政治界、対外政策のずぼらさ、首の回らない赤字国債、行き当たりばったりで求心力を失う国会、不満で溺れる教育界、教師による犯罪、行方知れずの生徒達、頼りない授業内容。不幸な世界。日常生活での衝突に、人間関係での失敗に、自己存在への苛立ち、うやむやになる境界、あやふやになる意義。苦しいし切ないし、安心できないし、先の見通しなンて全然出来ない……けれど、少なくとも新しい命たちは祝福されて生まれてくるンです。望まれて求められて生まれてくるンです。赤ン坊は無垢だもン。いくら苦しくたって、私たちが努力して、なるべく良くして、この世界を次の命たちに受け渡さなきゃいけないンです。今までだってずっとそうしてきたし、これからだってそうしていくべきだし、私たちだってそうできるはずなの。希望が降って沸いてくるわけじゃない、探して見つけて、あるいは自分たちで作らないと。私はそう言う未来を軌跡くンとも作っていきたいと、是非一緒にやっていきたいと思います。思うンです。……少なくともこの一年ちょっとの間、一緒に美術部やってきたンです。ビブってきたンです。一緒におしゃべりしながら絵を描いて、私楽しかったなぁ、ずっと卒業まで楽しく出来たら良いと思ってるンですよ。軌跡くンのこと、おトモダチだと思ってます。仲が良いもンって、他の人に言える数少ない友達です。悩みがあったのなら言って欲しかったし、苦悩があるなら言って欲しいな。相談に乗れないほど、私狭量じゃないンですよ？　確かにあちこちちっちゃいけど、私気にしてないけど、心の方は広いつもりなンです。反比例して。反比例ってなンだか今一まだよくわかンないけど、外見に反比例して心は北海道なンです。むしろ本州です。でもこれからの問題はグローバルだから、アメリカとかカナダとか言っても良いかも……イタリア行ってみたいなぁ。きっと軌跡くンがいなくなったら、たくさンの人が悲しくなると思

う。です。そしたら、不幸な世界がもっと不幸な世界になっちゃって、不幸不幸世界になっちゃって、貧乏神が所狭しと犇きあってなンだか逆に賑々しい感じで、皆やる気を失っちゃうかもしれないから、これは一大事な世界的問題だと思うンです。一つ一つ小さい事が積み重なって、一大事に発展するンだよ。本当だよ。軌跡くンがいなくなっちゃうのが小さい事だって言ってるわけじゃないンだよ。本当だよ。そのまま軌跡くンが一大事……軌跡くンは大事なンです。少なくとも軌跡くンが消えちゃったら、私は困っちゃう。美術部がしンみりしちゃうンです。美術部が寂しくなって、私もきっと悲しくて、だから部屋全体が寂しくて悲しくなります。悲しい。哀しい。悲しくて、私はきっと泣く。私は絶対泣きます。泣きます。少なくとも世界中でたった一人の少数派で、のけものけもの笑いものでも、軌跡くンがいなくなったら泣きます。毬雲雛鳴の号泣ショウが開催されて千客万来、あれよあれよと言う間に時間が過ぎ去って、私お婆ちゃンになって、でも泣きます。泣くもン。わぁわぁ泣く！　眉毛がハの字になります。だから軌跡くンが死ンじゃうって言ってるだけで、凄く残念で、残念で、惜しくって、悔しくって、で、悲しいです。いけないよ、駄目だよ。よ～く考えよう、命は大事だよ？

　グッドラック・グッドラックだよ。欠けてる方のラックじゃないよ、棚や物置の方のラックじゃないよ、楽しくて幸せなほうのラックだよ。アヒルさンだって優雅に見えても、水面下でばたばたしてるンだよ。してるンです。折角奇跡的――あ、駄洒落じゃないです、ミラクル☆の方の奇跡です――奇跡的に生まれてきたンですよ、軌跡くン。卯生ちゃンとも会えたし、私とも出会ってくれたし、何でそれを無駄にしようとか言うンです？　わかンない。別にいいもン。私馬鹿だもン。馬鹿じゃないかもしれないけれど、馬鹿だもンって、口癖みたいに言うもン。いけないよ。軌跡くン、優秀だし、いろいろ出来るじゃない。綾取りが得意なのも見せてくれたよね。のび太くンみたいだねって誉めたら、嫌な顔されちゃった。あの時も悲しかった。悲しかったンです。ね、自殺なンか……ううぅぅ……自殺

なンか駄目だよ、いけないよ、ごはっとだよ、禁中並公家諸法度だよ！　軌跡くン、自殺なンかしちゃいけません！　殺されるだけでも駄目！　殺す方も殺される方も悲しい人だよ！　殺人事件も自殺社会も反対！　禁止事項です……拘束対象です！　アウトバーンなこーそくじゃないンですよ、ホールドアップなこーそくです。ですです、ぅ、あああン。駄目！　なンでこンなに言ってもわからないかなぁ、わかりづらいこと言ってるかなぁ、私説明下手かな、説得下手かな？　下手かしら？　そうじゃないでしょ！　軌跡くンがいけない、いけないことするから、私悲しくて、色々言うンです！　あぅぅぅ、ぅ、ぁぅ、なンて言ったらわかるンだろ、ホント、もぅ、もぉー！　自殺とか言っちゃ駄目、ちっとも大丈夫じゃない、y軸対象で逆方向！　何が自殺の方法ですか、馬鹿馬鹿！　阿呆！　間抜け！　土手南瓜！　四字熟語ぉ！　おたンこなーす！　似鳥ユキエ！　あのキャラ太宰治好きなンです、知ってた？　太宰治気取ってンじゃねーよ！　自殺とかいけないもン、ありえないもン……困る、ぅぅ、考えるだけで涙が出るよ。ぼろぼろしちゃう。するもンばぃいンですー！　ですですー！　だから死ンじゃいけないって、ずっと言ってるじゃン、じゃン、じゃないですかぁ！　もうっ、軌跡くンのばかぁー！　ばぁあああーかぁああ！　え〜ンっ！！　もう知らないっ！」

　びしぃ！　がさっ！

　き——ばたんっ！！

　たたたたたた………。

　乱暴に筆ペンを放り投げると、自分荷物を引っつかんで、毬雲は美術部室を出て行った。

「……いや、僕、何も言ってないんだけどな……」

　とにかく、アイツには驚かされる。ちょっと状況を整理してみよう。

　ええと……、結局、僕は今日学校へ登校した。いつも通りに。授

業を普通に受け、普通に昼食を食べ、午後の授業もこなし、美術部活動日であるから、美術室に来たわけだ。道具は広げてあった（今日は三本の筆ペンと画用紙）ものの毬雲自身は居なかったので、こっちも勝手に道具を広げて絵の続きを塗っていた所、彼女が帰ってきたのだった。座って、毬雲も絵の続きに取りかかったな――と思った矢先、先ほどの台詞が始まったのだ。

少しも口を挟めなかった。

挟もうとしたタイミングで次の言葉が来る。

しかもまくし立てながら、こちらは少しも見ていなかった。絵を描きつづけながら、説教していきやがったのだ。勿論、しっかり完成させていったようだ。

「どれだけすげぇ奴なんだ……」

呆れてしまって、実感が追いついて来ない。

しかし……今日学校に来て、良かった。

あれは日にちを置いたら、さらに醗酵して余計わけがわからないものになっていただろうし、下手をすると家にまで出向いて来られた上、同じような事をまくし立てられたのかもしれない。そうしたらもう、自殺プランどころではない。毬雲の様子は狂人の沙汰だった。

だから苦手なんだよ、アイツは。

「確かに凄かったねー。あたしはあんな台詞思いつかないよ」

「…………」

まるで今まで登場していなかったかのように気配を消していた卯生が、ここで口を開いた。美術室の端の方に椅子を持っていって座り、雑誌を読んでいたのだ。関係などこれっぽっちもしていない、背景としての部屋のオブジェの如く。裏切り者め。

「あれー……もしかして、きーき怒ってる？」

「怒ってないさ」

「ぶっきらぼうじゃん。ぶっきらぶっきら。嫌ですねぇ、契約内容果たしただけじゃん。心配しなくてもいーよ。ななちゃんの方から

も話が漏れ出したりしないよう、それとなく言いくるめておいたから」
「そりゃ助かるね」
あの調子の毬雲に他人へ言いふらされたりしたら、恥の上塗りとかではなく水梳軌跡という人間像が根本から揺らぎかねない。その辺りの気配りをしてくれた事は感謝するが、しかしそもそも卯生が毬雲に話さなければ……もっと言うのなら捨てたルーズリーフを拾うだなんて非常識をやらかさなければ、こんなに疲れずに済んだのだ。
当の本人は、ぶっきらぶっきらと言いながら、毬雲の残した画用紙を覗き込む。
「うわっ！　きーき、凄いよ！　ななちゃんは相変わらず巧みだねぇ～」
「だろうよ」
卯生がぱたぱたと画用紙を持ってきた。
「なんて言うか、何描いてあるんだかわからないけれど、凄いね。抽象画って言うんですか、こう言うの？　コンビニで売ってるような筆ペンで、ここまで描けるもんなんだねー、へーっ！」
「コンビニで売ってようが画材屋で売ってようが、筆ペンは筆ペンだろ」
画用紙を覗き込む。
乱暴に一息で描かれたラインが、そこには折り重なっていた。配置されているそれぞれの線は、勢いがあるのに計算されているような印象を受ける。川のように渦のように。緻密な心算の上成り立っているであろう、気持ち良いそれらの黒線を……しかし、幾許かの水滴が滲ませていた。
毬雲の涙だった。
「涙も含めて作品みたいだな。全く、アイツはどんな画材ででも絵を描きやがる」
「ふぅん……」

卯生はその絵をためすがめつ眺めていた。何が描かれているのか、考えているのだろうか。
今日は珍しく解説が無かったので、それは僕にもわからない。
「それで」
やっと脇に絵をやって、卯生が言った。
「するの？」
「何を？」
「自殺」
「するよ」
当然だろ、と付け加えて、自分の絵に取り掛かる。今日は青色を交えてみる……が、少し明るすぎたな。黒を混ぜてみるか……？　黒を使うのはちょっと外道な感じがするんだが……暗くなるだけで、深みが出ないし。ま、やってみてから考えよう。
会話は続く。
「ななちゃんはあれほど悲しむのに？」
「確かに申し訳なくは思うが……アイツが悲しむからって、それは僕に何の影響もおよばさないよ。毬雲の悲しみは毬雲の悲しみで、僕の自殺は僕の自殺――別物だ」
「残酷な物言いだよね」
「残酷かもしれないけれど、本音だよ。さっきの毬雲の説得は、一方的な感情に過ぎない。自分が他人にとって、……毬雲が僕にとって、それなりに大事だと思われている――そんな勘違いで構築された言い分だろう？　僕は毬雲のことを、同じ学校の同じ学年の人間……それ以上にもそれ以外にも認識していない」
ぺたぺたと色を広げてゆく。
やはり薄っぺらい暗色になってしまった――が、逆に良いかもしれないな。
「そ――。ま。わかるけどさ」
卯生はそう言って、僕の絵を覗き込んでくる。
見ても良いが、僕の絵は毬雲と違って拙いぞ。メッセージ性もほ

とんど無い。
「毒殺なんかどう？　毒自殺」
「それは僕の絵を見て思いついたのか？」
「うん。ぁ、違うって。タイミング的にはそうだけど、相関関係は無いって」
　笑って注釈をつける。
　まぁ、そんなところで気を悪くするほど、僕は悪い性格していない。
「で、毒自殺？　面白いネーミングだとは思うけれど、具体的には？」
「具体的にも何も、毒を飲んだり注入したりで、ぽっくりサヨナラって言う手筈だよ。面倒臭くないし、確実じゃん」
「お膳立て次第だな……しかし、毒って言ってもいろいろ在るぜ？」
　ミステリジャンルでお馴染みの青酸カリやらヒ素やら、殺人に使われるものは勿論の事……安楽死用の薬剤も病院にはあることだろうし、広く言ってしまえば賞味期限の切れた食材ですら毒だ。塩酸硫酸塩基性、酸欠を狙うのなら一酸化炭素も毒になるし、神経系をそのまま麻痺させるフグ毒。殺虫剤は人体にそこまで影響を及ぼすわけではないが、量次第では虫のように人を殺す。ニコチン、カフェインだって毒物――この間僕が飲み干したコーヒーすらも、そういうわけで。
「及ぼす効果もそれまでにかかる時間も、致死量も違うんだ。ただの空気だって、血管に直接叩き込めば毒になる――漫画にあるみたいにね」
「うぅん、そこは調べれば良いんじゃないかな？　インターネットでぱこぱこって」
「悪くはないが趣味じゃない」
「うーわーばっさりー」
「面白くないだろう。演出上どうしようもなく選択するならまだしも、毒自殺メインでそれだけじゃ、あまりにもあっけない気がする

んだ。調べてみて、良さそうな毒が見つかったら教えてよ」
「人任せにするねぇ。良さそうな毒って例えば？」
「三日間笑い続けて死ぬとかかな」
「ドクキノコ」
「けいたいでんわ」
「ドコモダケ」
「とんでもないわ」
「ドンダケェ」
即応した卯生は大したものだ。
一端会話が途切れた所で、色を変える。うーん、塗るたびに追い詰められていく気分だ。描く領域も、色の幅も、どんどん限られていくように感じる。絵を描くとはなんと難しいものだろう。コンセプトが無いからかもしれないが。
核、根幹は大事だと、しみじみ思う。
「んー……何度か訊こうかって思ってたんだけどさ。この際だから、思い切っていいーかな」
「うんん？」
「きーきに疑問、質問、アンチモンです」
「なんだそれは……」
「第五十一元素。鉛に似た感じの元素だったかな……毒性があるんだ」
「知らねぇよ。あ、さっきの毒自殺を受けてるのか。……わかりづらいな！　……えっと、それで質問って？」
「何できーきは美術部なの？」
「あー………」
成る程、面倒な質問だ。いや、答えるのが面倒なのか。
ま、いい。話して得があるわけじゃないが、損するわけでもない。パレットを机に放り、絵筆をバケツに突っ込んで、僕は軽く伸びをした。ぐぐっと。
「去年は卯生、Ｂ組だったからな」

因みに僕は、二年連続でC組だ。
「そう。だから『幽霊部』が出来た過程も、きーきがここにいる過程も、よく知らないんだ」
「大したことがあったわけじゃ、全然無いんだけどね」
きっかけは、一年よりも前……この学校に入学した時にまでさかのぼる。
高校一年生の入学式当日、式は体育館で行われたが、待機場所やらは一年C組の教室だった。毬雲雛鳴、ま。水梳軌跡、み。五十音順で席に座らされたので、不自然な運びは何もなく、毬雲は僕のひとつ前の席に座っていた。その時は、なんだかちっちゃい女の子だなぁ、と思ったくらいだった。ちっちゃな女の子は席につこうとする僕に微笑みかけて、雛鳴って名前なンですよろしくー、と挨拶をしてきたので、こちらも軽く名乗り返し、暇な待機時間を潰すように会話をしたのだった。随分とフレンドリーな奴だな、と思いつつ。
この学校の生徒として最初に会話をしたのは、毬雲だったのだ。話していても思ったし、彼女のクラスメイト自己紹介の時にも思ったが、毬雲雛鳴は結構な変人だった。それまでは保呂羽卯生のことを変な奴だと思っていたが、その遥か上を行っていた。いくらなんでも、名前の前に「美術部員です」は無いだろう。
ちっちゃくてフレンドリーの次に、変で、そして面白いやつだという印象。
と言うわけで……何となく毬雲のことを気にかけつつ、高一の序盤はスタートした。やがて、この学校には美術部が存在しないとことが判明する。なら順当に描画部とやらに入るんだろうな、と思っていたら(僕だけじゃない、誰もがそう思っただろう)、毬雲のとった行動は違った。彼女はあくまで美術部員だったのだ。
のんびり普通に、ちゃっかり強引に、美術部を始めた毬雲。
入る部活を特に考えてなかった僕は、暇潰しにも近い感じで、放課後の毬雲に付き合ってみた。彼女は美術室を根城にしていた。あまりにも自然に美術室を使い始めるものだから、美術科の先生さえ

も美術部が復活したのかと、勘違いしていたほどだ。正直な話、はじめの頃は僕も普通にそう思っていた。あるいは描画部の一人として美術室を借りているんだなぁ、と。しかし実際は、何の申請もしておらず、勿論何の許可も下りてない、『幽霊部』だった。

　最初の定期試験までそれが判明しなかったのだから、よっぽど当たり前のように使っていたんだろう。

　逆に言えば、その定期試験が返却された所でバレた。例の数学の点数十七点＆テスト用紙の落書き事件だ。ぶっちゃけ他の課目も散々だったわけだが……、それより何より「ビブだもン」の発言が効いた。何それ、とクラス中で話題になったのだ。

　……実は。

　幽霊部こと現美術部も、最初から最後まで部員が二人きりだったわけじゃない。クラス中の話題になった頃、話を聞きつけ面白がって入部（と言っても美術部に入り浸るだけだが）する輩が、結構な数いたのだ。正確には覚えてないが、少なくとも部としての申請を出せる五名以上の人間はいただろう。事実、そう言う話も出た。

　――いっそのこと、復活させちまおうぜ――『俺ら』のビブを。

　絵もろくに描けないし、描こうとすらしない、それどころか何の創作意欲も無いような奴等が、たむろし始めたわけだ。ある意味至極当然な流れだったろう。部活を結局選び損ねたり、先輩たちとうまくやれなかったりして、行き場をなくした新入生どもが、目に付いた手付かずのスペースへ掃きためられるように集った――と言うこと。そして、そこで勝手な仲間意識とコミュニティを形成した――だけのこと。

　毬雲と違って、なんて面白くない連中だ。

　毬雲にとっても、面白くなかったらしい。

　亀裂は、あっという間に入った。美術室で行儀悪く月並みな雑談を続ける彼等に、一度毬雲は、「邪魔です」と言った。その時彼等は軽く謝った。次の活動日には何も変わらない。二度目毬雲は、「邪魔です、他でやればいいンじゃないですか」と言った。彼等は美

術部室から出て行った。しかし次の活動日には、何も変わらない。最後に毬雲は、「ああ。あなたたち無意味なンですね」と言った。彼等は毬雲を罵倒した。
えげつない否定の言葉に、キレたのだ。
無様で醜悪この上ないあの時の出来事は、あまり描写したくない。毬雲も幼く見えるが、彼等のような人間はそれよりも幼稚だ。なまじちっちゃく舌足らずで成績の悪い毬雲は、徒党を組んだ凡人どもには、ひどく矮小で目障りな存在に見えたのだろう。毬雲のために集まってやってるのにとか、それこそ何様のつもりだったのだろうか。
とにかく、僕はその日、毬雲の涙を初めて見た。
それで。
僕はそれ以上、馬鹿らしくて下らない事この上ない、何より見聞きするのに耐えられないやり取りを終らせたくて、介入した。毬雲が目障りなら、コイツのいないところへ行けば良いだろう。絵を描きたいのなら描画部へ行け。何処にも行けないのなら、何処にも居場所がないというのなら、確かに君たちは無意味な人間だ。毬雲の言いなりになりたいのか？
まぁ、殴られた。
さらにそれから数ヶ月、友人が出来なかった。
ただ、毬雲に「あンがとぅ」とだけ言われ、「邪魔です」とは言われなかった。
その数日後から、『ブービー・ヒナナ』の呼称が広まり始める。毬雲は全然気にしていなかったが、二つ名というより、やはり元は蔑称だったのだ。
「美術部を——続ける理由は無いけれど、やめない理由はそんなとこ」
自分の絵をかざしてみたりして、そう言った。うーん、青と黒はやっぱいまいちかー？
「ふぅーん……。…………それさぁ」

卯生は、人差し指で自分の顎を軽くつついてから、続けた。
「嬉しかったんじゃない？　ななちゃん」
「んー……？　けど、奴等を拒絶したのは毬雲だし、きちんと意思表明したのも毬雲だし……あれはアイツらしい確信的で簡単な物言いだったな……僕はたまたまそこに居合わせただけだぜ。グリコのおまけみたいな感じ」
「おまけ嬉しいじゃん」
「だけどさ」
「だけども、ねぇ。多分、ななちゃんの方はそー思ってないよ。きーきが支持してくれて、嬉しかったんだよ」
「わかって言ってるでしょ」
「一言お礼されただけだって」
「まーね」
どこか感性のずれた、言動もずれきった変人ではあるが、毬雲は嬉しかったんだろう。結果、僕に対して変な信頼と、変な期待をする事になった。嬉しかったから——悲しくなるんだろう。それがわからないほど、人でなしはやってない。
けれどそれでも、だ。
「何を言ったところで、決心は揺らがないさ。僕はたまたまそこにいただけだし、毬雲は自分を通しただけだし、僕は自殺をするだけだし、毬雲は悲しむだけ。喜ばせようとして介入したわけじゃないし、悲しませようとして死ぬわけじゃないよ」
「…………」
う〜ん、と唸ってから。
「きーきは、きーきだなぁ、ホント」
保呂羽卯生はそう言った。
諦めたような、でも、さっぱりしたような、笑顔だった。
「そうそう。スーパーマンにもウルトラマンにも変身しない、水梳軌跡君だ。さ、帰るか」
今の言い回しがちょっと恥ずかしかったのもあって、手早く画材

を片付け始める。
「あれ、今日はもうおしまい？」
「絵の具も乾いてるし、丁度いいだろ」
「これは？」
毬雲の絵をひらひらさせる。
「部室にしまっとくよ」
自分の絵と、毬雲の筆ペン絵（水墨画？）を重ねて、僕は部室へ向かった。
二つの絵を見比べつつ、何とはなしに毬雲の言葉を思い起こす。
………。
……。
あ、そうか。
「——およ？　なんかすっきりした顔してるね。トイレ行って来た？」
「ちゃうわ。ただ、手が届いただけ」
「何によ」
「明日へ続く」
「はぁー？」
文学的に言えば、もしかしたら皮肉な出来事とやらだったのかもしれない。
けれど、毬雲の説教のお陰で僕は思い至ったのだ。
望む自殺の発想に。

四頁目

一週間と一日前。

人間は考える葦である。
フランスの（今の若造の感覚としては）古い哲学者が記した、有名な言葉だ。……曰く、人は植物の葦のように弱々しいが、その頭脳で思考を行え、そしてそれこそが人の人たる理由――人間の価値であると言うこと。あるいは同じくフランスの、またほぼ同時期の哲学者である彼の言葉を引用してみても、良いかもしれない。
我思う、故に我在り。
コギト・エルゴ・スム――ありとあらゆる事象の存在に疑いをかけ続けた彼が、唯一その実在を認めたのは、現在何かを疑っているという自分――つまり、思考という行為だけだった。言葉の響きとは裏腹に、随分と消極的でこじんまりとした結論だ。しかしてそれが、近代哲学の出発点となったのだ。
「……っ！　……っ、…………っ」
人はとかく考える事が好きだ。
考えろ考えろ、と誰も彼もが念仏のように唱える。僕だって言う。例え同じ結果へ行き着いたとしても、過程として『考えて』行った結果なのか、『考えずに』行った結果なのかで、他人の評価は大きく変わる。大きな損得が関わらない限り、前者は認められ、後者は非難される。どのような結果に辿り着くかは、その人間が持って生まれた才能と環境で養われる経験によって差異が生まれるが、『考える』こと自体は誰にでも可能だ。『考える』行為は、大よそどんな人間でも行える努力であり、それをしないのは怠惰と怠慢――存在の否定でしかないからこそ、人は言うのだ。考えろ、と。
「くっ……、ふっ…………」
考える、とはどう言うことだろう？

「――ちぃ……、くっそ……」

それは、完璧に近付く、と言う事だろう。

人間は完璧や完全に憧れ、それらを崇拝し、そう成りたいと、そうで在りたいと、願う。どんな人間であろうと、最初はそのはずなのだ。妥協はするかもしれないが、それは１００％があまりにも遠いために、全うするのが現実的な領域へと、目標段階を引き下げているに過ぎない。結局、その段階までは全うしたい――その程度には完全でいたいと願う。願い、そしてまた考える。

とどのつまり誰だって、そこそこには完璧主義者なはずなのだ。

「………、はあ、はぁ、……ふっ、ぅう……」

けれど、疲れる。

完璧主義者は、疲れる。

完璧は疲れる。努力は疲れる。思考は、疲れる。

届かず、報われず、終らない。

走り疲れるように、歩き疲れるように、疲れる。

疲れるのだ。

疲れたら、やがて停滞を求める。

転倒しても転落してもいい――停止させてくれ。

――頼むから。

「はぁー、ふぅー、はぁー、……っ！」

それこそが自殺だ。わかりやすい終止符なのだ。

要するに人間である事に疲れた、と言うだけで、自殺に他の理由など要らない。人が死にたくなる、簡単すぎる要因。動物以下に成り下がれるのなら、死なくたって別に良いのだ。『人』――『思考』を停止させられたら、それだけでもういい。ただの葦へ脱落――堕落したい。

そう、終止符。

「あー……、終了、か」

思い至ってみれば、やたら自殺への注文が多い僕は、まだまだ完璧主義者であり、初志貫徹にこだわっているのであり、努力し、思

考を続けて、つまり人として生きているのだろう。強制終了である自殺に対して、しかし正当な手続きを取ろうとしていると言う、矛盾。絵に描いたように死ぬ——納得の行く絵を描こうともがいている——完全へ到達したがっている——それゆえに、遠く、長く、結論が出なかったのだ。当たり前だった。

望んだ通りの絵が描けるはず無い。

生きている間に得心行くはず無い。

だったら——ぎぢぃぃいいいん！！

いん、いん、いん、いん……。

せ、

世界が、縦横、に、揺れてる……！

「……あ、わりぃ……大丈夫か、水梳？」

「ぅ、あ——あう、へいき」

右サイドからのバスケットボールが、横顔に直撃した。耳鳴りがしている。眼鏡が吹っ飛んでいる。じんじんする。試合が——授業が終了したと思って、気を抜いていた——。弛緩した肉体と精神に青春の波動を撃ち込まれた。夕日に向かって走りたくなった。ならんわ。クリティカルだった。バスケットボールは重かった。愛みたいだ。豪快にダンクシュート。水も飲みたかったのだが、忘れてしまった。どうでもいい。あ、よくねぇ。冷やすべきか。とりあえず痛い。ITEEEEE。IT企業。関係無っ。あああもう、ああもう。間抜けだ。散々だ。

………。

水曜日の五限目、体育の授業。

この時間は、そんな事を考えて終った。

＊　＊　＊

放課後、学校の屋上で卯生と話す。

僕の自殺方法について——だ。明日へ続くと言った手前、説明し

ないわけにはいかない。
　今日は生憎の曇天模様だが、その程度で僕の心は浮きも沈みもしない。さっき受けた顔の痛みも大分引いた。卯生が天文台の階段に腰掛けたのを見て、焦燥するでもなくもったいぶるでもなく、極めて普通に僕は話を始める。努めるのは、シンプルにわかりやすく解説することだけ。コイツは優等生なので、生徒引きのジョークなど必要無いだろう。
「で――――」
　例えば。
「これは例えばの話だが」
　空想話で、妄想話で、これがそのまま解答だなんて思ってもらっては困ると言うことを、僕は予めきちんと説明しておく。
「まず、ナイフを用意しよう。市販のカッターナイフは流石に殺傷力に欠けるからやめておくべきだろうけど、人を殺せそうなナイフなら何でもいい。最悪包丁でもいい。つまりこれが直接の死因になるわけだ。次に、本棚を用意する。勿論本も、本棚をある程度まで埋め尽くすくらい、用意するんだ。本棚は固定式じゃなく、また背の高い奴がいい。身長くらいは欲しいな。道具は、あと……糸。そして必要なら、画鋲やテープだ」
　ここで一端言葉を切る。
　ややこしいから、脳内で道具を用意できるまで待つのだ。
「……いいか？　オーケー。そしたら、ギミック――と言っても簡単なもんだが――を用意しよう。はじめに本棚の上段に本を敷き詰める。本を取り出し辛いくらいに、本や消費者のことを考えてない本屋のように、ぎちぎちに。そしたら、その本と本の間に挟むようにして、ナイフを『据え付ける』。刃はこちら向きだ。ツバがあるのなら、それを本の背に引っ掛けるようにするとベスト。固定できたか？　後はもう一息だぜ。本棚を、『傾ける』。もう少しで倒れそうなくらいに。そして上部に糸を画鋲かテープで固定して、ピンと張ったままその糸を……ドアに『引っ掛ける』。そう――今、倒

れそうな本棚が、糸の張力によって、かろうじてバランスを保っているところだな。これで完成だ」
もう一度言葉を切り、待機。
卯生の顔が納得行ったようになったら、続きに入る。
「ああ。あとは、『所定の位置』に座るか寝転ぶかして、“第一発見者”がドアを開けるのを待つだけだ。彼、または彼女がドアを開く――と、ドアに『引っ掛けていた』糸が外れ――結果バランスを失い、『傾けていた』本棚が倒れ――『据え付けていた』ナイフが――『所定の位置』にいる僕の胸元、ないしは首元に――」
どすん。
「――突き刺さる。“第一発見者”の目の前で、“第一発見者”の手によって、僕の自殺は完成するわけだ」
さて――話の根幹はここからだ。
今までの部分は、実はどうとでもなる部分だったりする。例えばと断った理由がそれだ。
「『そして』、だ。“第一発見者”は一体どんな行動に出るだろうか？　また、そもそも“第一発見者”はいかなる人物で――むしろ、どういった人物を“第一発見者”にするべきなのだろうか？　……ここで、そこに僕の親を当てはめてみる。自宅でこの自殺を行うのなら、親が第一発見者となる確率が、最も高いからな。僕が目前で死ぬのを見た親は、どんな行動に出るだろう――？」
駆け寄る。
救急車を呼ぶ。
この辺りが妥当な線だろう。
だが。
「『もし』。親が至極冷静で、且つこれが自殺であり、さらにその引鉄を引いたのが親自身であり、さらにさらに、その場の状況を読み解く事が出来たとしたら……。そう考えてみる事が、この自殺法の焦点だ。――ところで」
ここで一端、話題を変更する。

必要な迂回だ。急がば回れと言うまでも無い。

「ところで死ぬことが周囲に迷惑だと言う話は、以前したよな。しかし死に方に関してはどうだろう？　身内からしたら……特に、両親からしたら。自分たちの子供が死ぬのは、勿論残念で悲しいことだろうし、迷惑かそうでないかで言ったら断然前者だ。けれど、死に方によってその度合いは変わってくるんじゃないか。事故で死ぬのも病気で死ぬのも仕方がなく、運命を呪うしかない。誰かに殺されたのなら、殺人犯を恨める。だが、それが――自殺だったら？　運命のせいにも他人のせいにも出来ず、もしそれでも挫けずに何か、誰かを槍玉にあげるとしたら――自殺した当の本人になるだろう。ひいては、当の本人をそうさせてしまった周囲の人間――筆頭で自分たち肉親だ。つまり、自分たちの罪が問われてしまう。迷惑だと言うのなら、自殺されるのが何より迷惑だ」

毬雲は、死んでも殺されても駄目、殺す方も殺される方も悲しい人だと言ったが、実際のところは自殺よりも殺人、殺人よりも事故病気で死んでくれた方が、まだしもましだろう。勿論死は残念な事で悲しいことで、あってはいけないことかもしれない。

それでも、やっぱり、特に、だ。

「自殺は禁忌なんだよ。動物は他の動物を殺すし、人間も毎日鶏・豚・牛から虫けらに至るまで、年がら年中何かを殺害し続けてる。身の危険が差し迫った時、他人を殺すか自分が死ぬか二者択一の状況なら、まずほとんどの人間が殺人を選ぶ。それらは生存するものとして、当たり前の心理で――自殺を選択するなんて、生物として破滅してる。異常だ」

異常で、在ってはならないこと。

正しくない、間違った、ポンコツ。

そんな子供を持ってる親は、親として失格なのだ。

――少なくとも、世間様の認識としては。

「それでは話を戻す。僕の親は、彼等の手で自殺を達成した僕の死体を発見した。ここで運良く取り乱しもせず、状況を冷静に把握し

たとするのなら、ひとつのことに気付くはず。現場に残っている物体の中で、糸さえ回収、処分してしまえば――客観的に、この状況は『自殺ではなくなる』――と、言う事実に、だ」

そう。

僕は自殺しなかったし、親も僕を殺さなかった。

殺人の中でも事故に限りなく近い、通り魔や空き巣による殺人。うまくすれば、『家に侵入した何者かと揉み合った末に殺された、可哀想な息子の死体』に、仕立て上げる事が可能なのだ。たった一本の糸を、消すだけで。

「勿論、そこで糸の回収に走るような親は、実際にはいないだろう。けれど、もし家中が荒らされていたら？　金品が失せていたら？　ナイフが背中に刺さっていたら？　あるいは遺書に糸を回収して欲しいと最後のわがままが書いてあったとしたら？　話は変わってくるかもしれない。演出次第で、思考の方向も移る行動の種類も、変動する」

はたして、僕の親はどうするだろう。

人生最後の博打、賭博、そして一興。

自身の存在に対しての、最終設問だ。

「絵に描いたように死ぬ――何も、自分で描ききる必要は無かったんだ。自分が絵筆を持てなくなった後でも、死に様に彩り沿えて描き飾ってくれる人間は、周囲にいるんだから。好きなように――最大限迷惑にならない形で、僕の死を語ってもらえばいい。例え正直に自殺だと公表された所で、それは彼等の選択の結果になる。選択の幅を残すこと、選択できるよう自分の死に関してお膳立てすること――以上が、昨日僕が思い至った自殺の発想だよ。とりあえずの形に纏め上げるべく、一日貰ったけれどね」

「ふぅぅ～ん……」

卯生は息を大きく吸って。吐いた。そして僕の説明をしばらく咀嚼するようにしてから、言った。

「自分以外の人間に、自分の死をあえて飾らせる、かぁ」

「そ」
「粋だねぇ」
しみじみと。
「でも、その話では親御さんがどう言う行動に移るかは、わからないんだよね」
「僕は死んじゃってるからな」
「それでも良いの？」
「この際結果はどうでも良いんだよ。重要なのは、そこまで僕が状況を用意したってことだ。迷惑をかけるのを怖れ、そのために僕なりの最善を模索したこと。それさえ伝われば良い。描きたかったのはその死に様だけで、後からどんな風に飾られようと、気にしない」
世の中に数多存在する真実がそうであるよう、解釈の問題だ。今日は空の大部分を覆い尽くしている雲の形や、その向こう側の星の配置。見る人によってそれらの意味は違ったように捉えられるが、実際それらはただ存在しているだけ——言ってしまえば、これも『思考』の賜物だ。
「んー……。はい、先生」
卯生がぴしっと手を挙げる。コイツはぴしっと手を挙げて発言をする、かなり希有な生徒だ。ノリ良く僕も、定型句で受けて立つ。
「はい。何ですか、保呂羽さん」
「ナイフは固定しないんですね？」
「良い質問ですね——とか言うけれど。悪い質問ですね、って受け答えは聞いたこと無いよな」
「馬鹿な質問をするな！　ってゆーのが、良い質問ですね、の反対語じゃない？」
そもそも、良い質問って何なんだ、都合の良い質問なのか、目の付けどころが良い質問なのか、最近ではむしろ質問してくれるだけで良い傍聴人じゃない……と、少し脇道に話が逸れた。気を取り直して、真面目に返答する。
「……ま、『据え付ける』とは言ったが、本と本の合間に『差し込

む』くらいが正しいかもしれない。テープなんかできっちり固定してしまうと、後からの他殺偽装が難しくなるからさ」
「ああ、そっか。敷き詰めた本は、本棚が倒れたら抜け落ちる……だから、ナイフの方に痕跡が残らないんだ。上段だけって言ったのは、バランス悪くするためか。全体量も軽くなって、細工もしやすくなる……しね」
「うん。自殺である事の決定的証拠は、残してしまってもいい。けれど、それの回収が至って簡単であることが大事だ。発見者の精神的ハードルを、どれほどまで下げられるかがポイントだね」
「なんだかゲームみたいだねぇ」
「ゲームだよ。コイン代わりに自分の命を使うだけ」
「現代っぽい台詞ー」
「現代っ子ですから」
最終的にそう言う所へ落ち着くんだろう。
努力に疲れる、辛抱の無い現代っ子。ぬるい愉悦に浸りきった現代っ子。
思考を放棄する傾向。脱落を願い、自殺に走る――ゲーム感覚の若者たち。結局は、そんなもんだろ。ゲーム中のスリルを求めているのか、それとも小気味良いゲームオーバーを望んでいるのか、焦点が違うだけ。願わくば、リセットされることの無いように。
「確実性は？」
「そこはもう、練習次第だろ。練習できるタイプの方法だし」
「ふーん……。……ん、いいんじゃないかな」
もう一度考えをなぞってみてからだろう、卯生はそう結論を出した。
「面白いと思うよ」
「そっか」
「そっけないじゃん。人が折角誉めてあげてるのにー」
「うーん。誉めてもらうのは嬉しいんだけど」
別に自殺法誉められても嬉しくないが。

「このまま使うわけには行かないからな。ウチの親じゃ、そこまで淡白な判断しなさそうだし」
「そだねー。きーきの親御さんじゃ、焦ってそれどころじゃないかもねー」
「だろ？　着想、着眼点――考え方の根本はやっと捕まえたけれど、実際にどんな方法を取るかは、まだ見えてない感じだ。はじめに言っただろ、例えばの話だって」
「成る程」
まぁ、根幹の部分……つまり死ぬ前に全てを終らせるのではなく、自分の死後、あえて他人に自殺の演出を任せてしまう――と言う部分は、悪くないと思う。ここから先は、まだ改良の余地があるし、逆にここからが楽しい（？）ところ……なのかもしれない。
「卯生の方は何か――」
言いかけたところで、
「あ――雨」
と、遮られた。
言われて空を見ると、ぴしっと額に冷たいものが命中した。二人とも咄嗟に立ち上がり、荷物を掴んで校舎内へ退避する。窓の外を眺めていたら、次第に雨音が聞こえてきた。
「…………」
「おー……、結構降ってるねー。夕立かな、こりゃ」
「やっぱ。傘持ってねー」
「あたしは持ってるよー。天気予報で言ってたからね」
ししし、と変な笑い方をされる。
く……天気予報は僕も見たんだ。見たが、３０％だったからな。迷ったものの、朝は時間も無かったんで持ってこなかったんだ。くそ、大したことじゃないのに悔しいぞ……。今日はなんだか、随分平和的で学生的な厄日だぜ。溜息が出る……。折り畳みくらい、常に鞄へ入れておくべきだった。
「おい、傘貸してくれないか？」

「ええ、何で？　持ってこなかったそっちのミスじゃん。て言うかうーうちゃんが濡れるじゃん」
「さっきの授業料」
「釣り合ってねぇー！　釣鐘と提灯どころじゃないよ。釣鐘と釣り針くらい釣り合ってないよ。釣りの三乗、つりキチ三平だよ」
「うぉう、なんか上手いこと言いやがった！」
「はい、さっきの授業料かーえしたー」
「小ネタ一つで早くも返済された！？」
「おっさきー」
明るい水色の傘を持って、帰ろうとする卯生。
ま、仕方がない。ビジネスライクな幼馴染だ。靴箱周辺を見てみるが、部活も終っていない中途半端な時間なので、人はほとんどいない。止むまで待つか……メンドーだなぁ。この学校の図書室は、あまり面白い本を置いてないのだが。
視点を戻すと、卯生はまだ帰らずにこちらを見ていた。
「アイアイする？」
「あいあいがさ？」
「ラブラブアンブレラ」
「必殺技みたいだが、あれは相手に合わせるって書いて相合傘だぜ。ラブい仲でもねーし」
「あはは、釣り合わないってあたしが振ったんだよね」
このネタ引っ張られるなぁ……。やっぱ高校生は恋愛なのだろうか。
「まーまー、考えてみたらきーき、私に自殺方法を話してくれるために、今日学校に来たんでしょ？」
「ん？　そだけど」
言ったたっけ。
「せーせはあたしの彼氏じゃん。忘れんなよ」
「………ああ」
どいつもこいつも情報が早いと言うか、頭が回ると言うか……あ

やかりたいもんだ。
卯生は玄関のガラス戸を開けて、傘をゆらした。
「てことで、そっちの分のギヴンをテイク」
「サンクスアロット」
靴を履き、外へ出た。
身長の関係上、僕が傘を持つ。結構大きい傘で骨の数が多く、明るいスカイブルーがコイツらしい。……相合傘とか、言葉自体が懐かしいな。酷くレトロな響きがする。今時、恥ずかしがるような事でもないだろうし、そう言う気分に漸近すらしない。ラブラブとかは、もはや小学生のノリなんだろう。
しかし、卯生の良い香りが気にならないこともない、距離だった。
やがて家に着き、傘を手渡した。アイツは受け取ってじゃあねと一言、歩き出した方向は、保呂羽の家とは違った。
どうやら寄る所が、あるらしい。

▼
▼
▼

一週間前。
約束も無いし部活も無い。躊躇無く学校を休んだ。
理由は特にひねらず、だるくて頭や喉が痛くて――つまりは仮病だ。休むことや仮病を装うことに後ろめたさはそれほど感じなかったが、時計を見るたびに今何時間目の授業を学校で行っているのかを考えてしまうあたり、僕も学生なんだなと思った。十時（二時限中盤）頃までベッドの上でうだうだしてみたものの、退屈だったので起床した。漫画やらを再読しつつ、時間を思う存分浪費する。浪費とは、無駄に消費すると言うことだ。無駄無駄無駄無駄無駄。そのまないない尽くしで日が暮れる……と、予想していたのだが、夕方になって携帯電話にメールが一件。

卯生だろうと思った。
しかし違った。
「毬雲……？」
毬雲雛鳴は、メールを使う事が少ない。かと言って電話を掛けてくるわけでもない。携帯電話という機器自体が不得手なのだろう。一応学生同士のたしなみとしてメルアド類の交換はしてあるものの、僕もそれほど携帯電話に堪能なわけではないので（使用するのは卯生か、一部の友人相手程度だ）、毬雲とのやり取りはほとんど美術室オンリーだ。
珍しくメールボックスに毬雲雛鳴の文字が光っているのを観賞してから、内容を表示させた。
件名……「槍振公園にいます」
本文……「軌跡君今日は。まだ暗くないから今晩はじゃないのです。帰宅してお家にいますか？　お家にいて暇だったら、槍振公園に来て下さい。場所はわかる？　軌跡君のお家の近くなんだけど」
「……ああ。毬雲、知らないのか」
今日僕が学校休んだこと。
別のクラスだしな……まぁ、仮病なんだが。にしても槍振……？確か近所の公園がそんな名前だったか……最後にあそこで遊んだのはいつだろ。てか、毬雲の家はこの近所ではないはずなんだが……電車通学だったはずだ。なんだ、わざわざ会いに来たのか？　うん？
何のために？
「まさか、砂場に作品を作ったから、見に来て――とかじゃないだろうな」
だったら凄い。かなり見たい。尊敬する。しかしそれなら写メールよこせば良いだけだし、流石に撮り方や添付方法がわからない事はないだろう。
………。
ま、行かない理由はない。

火曜日の時のように、毬雲対応は早いほうが面倒にならないのだ。
でも、しまったな。服装がパジャマのままだ。今から制服を着る気にもなれないし……近所だし、シャツにパーカーとジーンズでいいか。
外に出る。

＊　＊　＊

公園に着く。
この間、十分。久し振りだったので、少し迷った。
こじんまりとした公園だが、丸いジャングルジム、昨日の雨で湿った砂場、滑り台にブランコ、登り棒、街灯もきちんとある。子供の身体なら走り回る事も可能だろうし……もし公園と名乗るのに資格が必要だとしても、ここはその資格を十分取得できるだろう。くるりと見回して、学校の制服を見つける。
毬雲はベンチに座っていた。
鞄を抱えて、ちょこん、と。
互いに目が合って、少しの逡巡。火曜日のこともあるので、どう対応したものか少し悩んだが、軽く右手をひらつかせる程度の挨拶を選んだ。なるべく何事も無かったかのように近付き、毬雲の隣に腰をかける。近すぎず、遠すぎず、言葉は届いても指先は届かない、距離。
何の用か尋ねようかと思ったが、実は予想がついていた。
予測――むしろ、予感か。
毬雲の顔を見て、思い至ったと言うか。
なので、先に口を開いたのは毬雲だった。
「私服姿の軌跡くンは初めてです」
まずは無難な所から。
「私服って言うほど気合の入った代物でも、ないけれどさ」
「だらだら」

「だらだら」
「だらだーら。あ、今日学校に来てない……ン？」
「実はね」
気付いたか。と言っても、隠すようなことじゃない。
「そっか」
「ちょっとだるくて。風邪かな？　熱は無いんだが」
「いけないですねー。風邪は百獣の王って言うンですよ。医者の無愛想とか、図鑑速達とか、言います。ほンとだよ」
「いや、嘘だろ」
間違いだらけだ。そのうち、風邪は乾布摩擦で治しましょうとか言ってくるに違いない。
それにしても、毬雲はいつもより大人しい。美術室と言うテリトリー外なので、静かなのだろうか？　絵を描いていないからだろうか？　もしくは、だ。
「軌跡くンはほンとです？」
「いや、嘘だが。本当に具合が悪かったら、メールでそう返すからね」
「安心です」
「……ですか。…………」
「…………ウン。……………」
会話が、そこで途切れる。
街灯は既に灯っていて、空の色も少し歪なオレンジ色。向こう側は黒く染まり始めている。
予感。――ろくでもない、予感がする。
「…………」
「……ンー……」
隣を見る気にもならない。ひたすらに星の姿を探す。
だからさぁ、そーゆーのはやめてくれよ、と言いたい。苦手なんだよ。わかるだろう？　確かにありふれていて蔓延っていて珍しくもない当たり前のお話だけどさ、それゆえに対応が面倒なんだよ。

面倒面倒、こんな感想を抱く奴はマイナーかもしれないが、僕は面倒としか感じないぜ？　やっと方針も見つかったのに出鼻を挫くつもりか。ああそうなのか？

「………………………」

「……、……」

沈黙が続く。公園は賑わっていない。

誰かいてくれれば、まだ楽なんだけれどね。脇の道を通る奴等はいるけど、ベンチに着席中の若者二人を見かけて、余計な気を使ってくれる。全く皆様お優しいことで。流石に家に来られるよりはマシだったとは言え、公園ってチョイスも精神的に辛いものがある。公園はその名の通り公共物、だから誰だって利用する。だから誰だって見物できて、見世物のような気分だ。

「……」

「………………………………」

おいおい、いい加減進めてくれよ。星が数え切れなくなってきた。火曜日の事を思い出す。ああ、あの時はまだ良かった。べらべらと一方的に喋られるだけで、こっちはただそれを聞き流せばよかったんだから。五月蠅いとも思ったし突き刺さるものも無かったではないが、無闇に意味深で無意味に闇雲な、この無言空間よりはずっといい。あの時は自殺法の収穫もあったしね。今現在は、心苦しく息苦しいだけだ。

「…………」

「…………」

どうしろってんだ。こっちから切り出すわけにもいかないし。

あの部活の時、あの場で決着をつけておくべきだったか。放置された絵について卯生の奴と意見交換していたり、ビブの過去話をしている場合ではなかったか。今何をしてるんだアイツは。この状況、実は気付いてたんじゃないか？　女の子だしな。だったら何故言ってくれない。僕はとことここに至るまで、まるで考えなかったぞ。とことん裏切り者め。根も葉もない逆恨みだけどさ。

「……あの」
と。
「軌跡くン」
毬雲が、やっと続きに入った。
僕はなるたけ普通に返事をする。
「うん。何？」
「このあいだのこと……なンですケド……」
「……」
「火曜のビブの」
「ああ」
ふぅ。
来た来た。
ま、そう来るか。
火曜日の話から入るか。
妥当なところではあるだろう。
困るは困るが、沈黙よりもやはり会話だ。
ゆっくり自分のペースでいいから、進行させてくれ。
「うん、それで？」
「好きです付き合ってくだ」
「はえぇぇー！！」
焦るのもほどほどにしろよ！
なんだその単刀直入っぷり！
沈黙してただけだぜ僕たち！
「違うだろ！　色々違うだろ！　会話運びとか段取りとか文法とか間合いとか！　ゆっくりでいいっつってんだよ！　いきなり踏み込んでくるなよ！　一本取られちまう所だったよ！」
「うわ、軌跡くンからこンな突っ込まれたの、私服姿とおンなじで初めてです」
叫んでしまっていた。
くりっとした目をしばたかせる毬雲。

「いいから……！　仕切りなおせ。仕切りなおしを要求する！」
読者が置いてけぼりだ。
「う、うン……」
吸って。
吐いて。
深呼吸。
「だからね、好きで」
「切り込みなおすな！　順を追え！」
「軌跡くン、今日は律儀だな……」
「いつも突っ込み待ちだったのか……？　次は無いと思えよ……」
「……はい」
仕切りなおし。
過去をキャンセル。
僕も呼吸を整えて、ベンチに腰掛けなおす。
「あの、火曜日はごめンなさい。一方的に好き勝手意見言うだけ言って、返事も聞かずに飛び出して。でも、本音だよ。私は軌跡くンに、理由はどうあれ死ンでもらいたくない、です。死なないで欲しいと、思うンです」
「……ですか。まぁ、その意見は確かに伝わったな」
「うン。でも、あの後考えてみて、気付きました。軌跡くンはそれでも、自殺をやめるつもりは無いンだろうな、って。私があの時言った言葉は、聞き入れるつもりないンだろ、って」
「………、そうだな」
それは、気付くか。一年間、雑談しあった仲だからな。
だが、できる事なら気付いてもらいたくはなかったもんだ。
毬雲からしたら、それはあまり気分の良い発見じゃないだろう。
「どれも私の感傷です。どれも私の言い分だもン、軌跡くンからしたら——」
「どうでもいい」
先回りして、言葉を繋いだ。断言するように。

「ウン……」
ぐすっ。
鼻をすする音。
泣かせてしまったか、と毬雲を横目で見やったが……泣いてはいなかった。既に辺りも大分暗くなってしまったので細かい所までは見えなかったけれど、少なくとも泣いてはいなかった。まだ、セーフティゾーン。野外で壊れられると、それは手におえない。
「……で、どうしたらいいかなって、さらに考えたンです。夜も寝ないで絵を描いて、昼も寝ないで絵を描いて。何枚か絵を描いたけど、あンまり面白い出来じゃありませンでした。でも、クレヨンは素朴さを出すのに向いてるンです」
「そうか……絵を描いてたようにしか聞こえないな」
お前は絵を描きながらじゃないと、他の事が出来ないのか。
あと、授業を受けると言う選択肢は無いのか。
さておき――わかりやすい回路ではある。その結果思い至ったのが、
「それ、で。お付き合いできませンか、って」
と言う――結論か。
成る程、理には適っている。
この水梳軌跡にとって毬雲雛鳴が、同じ学校で同学年の生徒（加えたところで幽霊美術部員同士）以上の意味を持たないのであれば、それ以上の関係になってしまえばいいだけのことである。付き合ってる恋人同士であれば、互いにどうでもいいだなんてことにはならないだろう――と。
「…………さいですか」
「…………どうですか？」
「…………」
理には適っている。
だけどなぁ、それだけなんだよ！　わかりやすけりゃいいわけじゃないだろうが！

確かに予想はしていたし予測もしていたし予感もあったが、対応に困るんだよ、本当に！　お付き合いとか今時どんな告白の仕方だよ！　しかも告白の理由が不純って言うか、見当違いだろ！　なんでも恋愛に結びつければ受けると思うなよ！　高校生してますねぇ！

「……高校生と光合成って似てるよな……」

「え？　うン、確かに似てますね。小中学生と焼酎が臭え、みたいな……。え、ンぇ？」

「ごめん、超関係なかった……」

心の声が暴走した。

しかし、どうしたものか。

スカートを握りしめてる毬雲の手が見える。コイツのことが好きか嫌いで言えば、どちらでもないが回答だ。面白い奴だとは思うが、それ以上でもそれ以下でもない。面倒な奴だとは思うが、それ以下でもそれ以上でもない。毬雲の方からしてもそうなんじゃないのか。僕たちはそう言う『なんでもない』関係だろう。友達止まりだろう。勢いあまって勘違いするんじゃない。お前はそんな、ありきたりの展開を望むようなキャラじゃ、ないだろう？

………、…………。

沈黙が続く。

今度は僕が待たせている。

何故僕は悩んでいる？

心音はこんなにも静かだ。

つまり、ドギマギして返答に窮しているわけではない……なら、何故？

きっと、それは。

きっとそれは、やっぱり思い知ったからだろう。僕が死を選んだだけで、自殺の選択を知られただけで、こんなにも他人に迷惑をかけている。もし僕がこんな選択をしていなかったとしたら、毬雲は間違って思い違えた告白など選択しなかっただろうし、『なんでもない』間柄を望んで、きっとそのままでいられただろう。けれどこ

ことだ。
なら、今一度選択をしなくてはいけない。
思い直して諦めるか、傷つけ直して疲れるか。
笑顔を見るか、泣き顔を見るか。
面倒だ……。卯生の奴はなんて相手しやすいんだろう。アイツのせいだとは言え、そう思わずにいられない。
「……ふぅ」
ここで結論は出せないな。雰囲気的タイムリミット、次回持ち越しだ。
「ごめん、一週間」
「ンぁえ？」
「一週間、貰えるか。返事を考えるから、時間が欲しい」
「……ぅぅ……」
ああ、泣きそう泣きそう。眉を震わせるな。
唇をひくつかせるな。
「だから、一週間は死なないって言ってるんだって」
「死なない……」
「一週間はね。毬雲に返事をきちんと言うまで、勝手に死んだりしないから、それで今は勘弁して欲しい。大体方法も思いついたからそろそろ実行に移そうかとしていたところなんだけれど、毬雲の告白は僕にとってそれだけの価値が在ったと言うことで、やっぱり色々考えたりしたいことが出てきたわけで、だから」
おおお、口が勝手に無責任な言葉を紡いでいる……。
「だから、一週間貰えないか」
「……ン」
少ししてから。
毬雲は、頷いた。
「わかった。わかりました。一週間、だね」
「ああ」

「あうぃーく、待ちます」
「……さんく」
とりあえず安堵に胸を下ろした。今日のところはこれにて決着……。
どうにか毬雲を泣かせずに断る方法を模索しないとな。考えることが増えてしまった。一週間、七日、百六十八時間。分以下に直す気はしないけれど、猶予はそれだけ、ね。充分とは言えないが、不充分ではないだろう。
毬雲が立ち上がるのを待って、僕もベンチから立つ。
「帰る？」
「ン。軌跡くン家に泊めてくれるンです？」
「断じて断る。駅だろ？　送るよ」
「あンがとです。……ンへへ」
へらへら笑いやがって。お前と話している間に、夕方からすっかり夜に食い込んじゃったよ。沈黙時間の長いやり取りだった。無駄、無駄、無駄、だ。
公園を出る。
駅に着く。この間十分弱。
「また明日学校で？」
「別のクラスだろ。会うかどうかわからない」
「うーン、じゃ。また明後日、ビブでね」
「おう」
互いにあらん限り気軽な風に、手を振った。
その後、振り向くそぶりすら見せずに帰路へつく。
残り、一週間。

五頁目

六日前。

ちょっと考えればわかりそうなことだったけれど、恥ずかしながら気付いたのはこの日の朝になってからだった。様々に模索した結果、やっと見つけた迷惑をかけない絵に描いたような自殺——その発想の中心核が、『自殺に見せない自殺』なのだとしたら、そもそも今までの工作を続ける意味は無いと言うこと。つまり、恥の上塗り工作はもはや続けても仕方ない。むしろ自殺を疑われるだけ、有害とも言えるだろう。

だから前日学校を休んだことも、無意味だったわけだ。

上塗りした恥のほとぼりを冷ますためにも、毬雲との約束——返事待たせの一週間は妥当だったかもしれない。

「……やれやれだぜ」

昨日読んだ漫画の台詞をそのまま引用して、起床。

今日は普通に学校へ行こう。

＊　＊　＊

学校では。

いつも通り。

授業をこなし。

時間を消費して。

昼食は食堂で食べ。

卯生とは雑談をした。

毬雲には会わなかった。

美術部のない金曜日。

天文部はある曜日。

この日は卯生も。
参加したそう。
久し振りに。

＊　＊　＊

それだけで、何かあったと言えば、電話があったことくらいだ。
携帯電話に、ではない。家の電話に、だ。
珍しく、久し振り。
けれど大したことではない。
連絡網。

同期の生徒。
渡砂瀬々斗が死んだ。
享年十七歳だった。

▼　▼　▼

五日前。

授業はあったが、部活は自粛するところが多かったようだ。
美術部はと言うと、僕は乗り気ではなかったので毬雲に「休む」とだけメールを打って、参加しなかった。毬雲からの返信も、「うん」と言うだけの簡潔なものだった。一昨日の告白だけが、簡潔なやり取りになってしまった原因ではないだろう。毬雲が一人で活動したかどうかはわからない。アイツのことだから、もしかしたら活動したのかもしれない。
卯生は——登校して来ていた。
しかし学校に居る間、一言も話そうとはしなかった。悲しんでいるわけでもなく、苦しんでいるわけでもなく、不機嫌なわけでもなく、そしていつも通りなわけでもなく。表情に感情を滲ませない——アイツにしてはそれは非常に珍しい——何も感じさせない顔つきをしていた。それゆえに、外から観測するとどんな風にも見えて……まとっている空気は、非常に近寄りがたい印象だった。誰もが声をかけるのをためらい、また卯生自身から口を開くことも無いまま、

彼女は淡々と下校して行った。……彼氏を亡くすと言うのは、どんな気分だったのだろう。
ただ単に僕の感傷なのかもしれないが――この日は学校の何処に居ても、耳を澄ませばその話題が聞こえるようだった。
そう。
渡砂瀬々斗は人気者だったのだ。
快活で、優秀で、何も問題が無く――死ぬだなんて誰も思わなかったくらいに。

＊　＊　＊

渡砂の遺体を発見したのは、彼の母親だ。
その日、息子の瀬々斗は具合が悪かったらしく、学校を休んでいたそうだ。
当然のように共働き。彼は一人で、自分の部屋で眠っていたらしい。
……さて、結果から言えば――空き巣による強盗殺人事件だ。
屋内は荒らされ、置いてあった少量の金品は奪われ、そして運悪く居合わせてしまった一人息子は、空き巣との格闘の末、台所で空き巣が拝借していた包丁に胸を刺され即死。彼の部屋は本棚がひっくり返っていたり、本が散乱していたりして、大変な有様だったらしい。事件の起きたと思われる時間帯、周辺では不審な男が目撃されていたらしいが、帽子にサングラスにマスク――つまりは少しも頼りにならない人物像だ。手袋もしていたようで、指紋も見つからない。犯人は依然逃走中と言うわけだ。
不自然なところはいくつかある――が。
それが、僕が人づてに聞いた話の全て。
これだけで、僕にとっては充分だった。
「……ここで僕は何か独り言を言うべきなのかな」
いや。

わざわざ口に出すような台詞なんて、何も思いつかない。思うところはあっても、言葉にして確認などしなくて良いようなことばかりだ。つまりそれは、そう言うことだったというだけで——それ以上、話も傷口も広げるべきではない。
それでも敢えて。敢えて何かを言うのなら。
「よくできました……か」
呟いて、部屋のベッドで寝返りを打つ。
正直な話、予想していなかったわけではない。
そこまで僕は視野が狭いわけでも、観察眼が無いわけでも、ましてや楽観的なわけでもない。けれども、まさか、だ。宝くじを買って、その当選を夢見ていたときの気分にすら似ている。それに突然だった。毬雲への応対に思考と意識が割かれたとたんに、だ。渡砂は横合いから斬り込んで来るのが、本当に好きな奴だな。
僕は当惑しているんだ。
どいつもこいつもだよ。
いい加減にして欲しい。
「——とぉ、ん？」
そこで、メール着信音を今にもかき鳴らしそうだった携帯電話のライトに気付き、手に取る。開く。最初の音だけを高らかに鳴らし、携帯は沈黙する。
僕も沈黙する。
そのまま一時停止。
携帯を閉じて、開いて。
数秒から数分へ至る無意味な逡巡。
「…………」
タイトル、「お誘い」。
内容を見る。
……「明日の日曜日、遊ぼうよ。高くて美味しい物でも食べに行こうよ」、とのこと。
即ちいわゆる一般的に判断を下すのなら、それはデートだ。

「そうかい」
そうかい、そうかい、そうかい。
それでいいんだな。……それでいいんだな？
ならもう、何も言わない。
何も考えない。
ＯＫとだけ返信をして、電源を切り、携帯電話を乱暴に閉じて、机に置いた。電気を消して、ベッドへ戻る。倒れこむように布団へ埋もれ、目を瞑る。感情が行方不明だ。嬉しいとか悲しいとか、気持ち良いとか気持ち悪いとか、正常だとか異常だとか、区別がつかなくなる。
納棺？　お通夜？　お葬式？
知るものか。渡砂瀬々斗は他人だ。
僕に忠告はしても告白はしなかった。同じ部活の部員ではない。同じクラスになったこともない。メルアドもナンバーも知らない。知り合いであっても友達ではないし、ましてや幼馴染であろうはずもない。だから、とても、他人だ。
長い長い、深呼吸のような溜息を吐ききった。
さっきのメールの送り主。
それは、言うまでも無い保呂羽卯生。

六頁目

四日前。

午前六時。
えーえむ。おくろっく。
なんだ平日よりも早い時間に目が覚めてやんの、などと思いながら携帯の電源を入れ直す。昨日の返信のほぼ直後に、今日の予定についてメールが送られてきていた。大体のところにおいて文句は無い。この予定通り行動するので、今日は良いだろう。時間割のような安心感——アイツは何処までも優等生だ。
待ち合わせは午前の十一時。
一応集合場所を近所にするのは避けたらしく、目的地にて顔合わせ。とは言っても、ちょっと賑やかなその町まで出るのに一時間はかからないから、予備時間を取ったところで残すところ三時間半は在る。未成年っぽくない服がいいとか言われても、選択肢からしてそこまでの幅は無い。むしろどのラインから未成年で、どっからが成年なんだか……明確な判断を下せないくらいには、僕は服装について世間知らずだ。ここで制服がいかに楽なのかを自覚させられる。……時間割と言い制服と言い、学校に依存した生活をしてるもんだ。
悩むふりをした後、精々それらしいものをチョイス。
おっと……。
着替えるのは後にして、とりあえず顔を洗うか。

＊　＊　＊

「きーき。君さぁ……」
卯生は会って早々第一声、

「とりあえずジャケットを着てくれれば良いってもんじゃないよ？」
僕に駄目出しをしてきた。
呆れた風な苦笑いで、ずばっとばっさりだった。
「いや、他に着てくるものがなくてさ……」
「だったらせめて、もうちょっとマシな言い訳用意しておいでよ。輪をかけて格好悪いよー」
「マシな言い訳ってなんだよ……救いようの無いこと言うよなぁ。あー……んん。はぁ、お前しらねーの？　ちょっとダサ気なしわしわジャケットが今超クールなんだぜぇ――とか？」
「うっわ、マジないわー。あらゆる方面からありえないわー」
そう言って、きゃらきゃらと笑う。楽しそうだ。
卯生はと言うと、まぁ……お洒落をしてきていた。しかし残念ながら、お洒落の知識に疎い僕には、それを表現しきれるだけの名詞が揃っていない。赤を基調にしたシンプルなデザインのブーツ、タイトな長靴下（ハイソックス？　ニーソックス？）には薄らと柄が入っていて、黒っぽいスカートは短めで何かひらひらしている。ゆるりとした長袖のシャツは白地にオレンジっぽい柄、上に袖の切り落とされた丈の短いジャケットのようなものを着ていた。そして軽くアクセサリが首とか腕とかに絡まっている。――うん、全然伝わらなさそうだ。
似合っているとは思うが、それ以上のコメントを出来ない所がもどかしい。
ま、いいか。
加えて言うのなら、顔の印象がいつもと違う。
「うん？　化粧、してるのか？」
「んー、目元・口元だけだよ。あたしはまだ若い上に健康優良児だからね。素肌で勝負」
「それだけでも随分と、印象変わるもんだな……」
驚いた。お目目ぱっちり、唇ぷるんとしてる。
「そう？」

「ああ、美人」
「ぶっ。素面で言うなー」
「………」
うーむ、女の子ミラクルだ。どう対応したものかわからない。しかも相手が幼馴染と言う微妙で絶妙なポジションなだけに、誉めるにしろ茶化すにしろやりづらい。とにかく僕なんかよりはるかに、他人の視線に対して気合が入っていることはわかった。隣を歩くのに苦労しそうだ。
渡砂と学校外で会う時は、こんな格好をしていたのだろうか？　だとしたら、それは僕の知らない卯生だったのだろうと、今更ながら思う。羨ましいと言う感想を抱くのは的外れな気もするが、鼓動が高まってしまうのを感じた。こんな奴相手に小癪な話だ。
「仕方ないなー。最初はきーきの服を買おうか」
「は？　そんな金はないぜ」
「いいよ。あたしは今日お金持ちだから。お大尽様と呼びたまえ」
「お大尽――ねぇ……」
「むしろ今日は全部あたしの奢りってことで、どう？」
「――ふぅん」
ギヴ・アンド・テイクで、僕らの関係は成り立っている――か。この場合はどうなのか。何を施して、何を貰い受けているのか？　ちょっと考えてみて、すぐに保留にした。最悪こちらが借りを作ってしまっても、お金はお金で返せばいいだけのこと。金額と言う明確な値があるのだから、簡単な話だ。学生にとって決して軽い問題ではないものの、恩の貸し借りよりはずっとやりやすい。
「そうだな。そっちがそう言うなら、甘えさせてもらおうか」
「あ、素直だね。甲斐性無しじゃん、このこの」
「どっちなんだよ……僕の男らしいところが見たいのか？」
「うーん、それはそれで見てみたいけれどねぇ。あはは。今日は奢るってことで、あたしのファイナルアンサー……」
と、雰囲気を出すように指を振りながら言って。切り替えるよう

にこっちを向いた。
「では！　君を格好良くコーディネートしてあげようじゃないか」
「ありがとさん。頼んだよ、カリスマファッションデザイナー」
「任せなさい」
にこやかに僕へだけ微笑んで、卯生が手を軽く引く。
手を繋ぐでも、腕を絡めるでもなく、極めて自然に。
それがさも当然であるように、僕も応じて歩き出す。
そして一緒に、雑踏の中へ、個性を埋没させてゆく。

＊　＊　＊

服を買うため、店に着いて。
何気なく、どちらからともなく、携帯電話を取り出した。
電話でも、メール着信でもなく、携帯電話を取り出した。
僕のは簡素で、京都の土産のストラップがたったの一つだけ。
卯生のには、様々なストラップが思い出のように揺れていた。
暗黙の了解であるように、
無言で確認しあうように、
僕らは電源を切った。

――スイッチ、オフ。

今風の服を購入。
相変わらず僕は、ジャンルの名前もわからない。
知らない服でも、着る事は可能。
僕は着替えた。
卯生に誉められた。
似合ってるよぉ。
そいつはどうも。
お世辞だろうけれど、悪い気はしない。

隣り合って、悠々と歩く。
昼食をお洒落なカフェで食べる。
食堂では、飲み物込みで五百円以内に収まるのに、
この日は、一人当たり千円以上のお昼ご飯だった。
二千円以上、だったかも。
にわかには信じられない。
卯生の奢りなのだけれど。
仲良くお喋りをしながら食べた。
何を話したのか、覚えていない。
カフェを後にして、軽く散策、買い物めぐり。
ゲームセンターに行こうか。
ボーリングでもやろうぜ。
お互いにしばらく振りだった。
昔、家族ぐるみでボーリングをした時のことを、思い出した。
おぼろげな記憶。
あんなに重かったボール。
今では片手で軽く持てた。
だけどスコアに影響しない。
仲良くお喋りをしながらプレイ。
何を話したのか、覚えていない。
卯生には当然負ける。
花を持たせたのさ。
負け惜しみだねぇ。
健闘しただろ。
思ったよりは。
ボーリング場を後にする。
おやつが食べたいと言われた。
勝手に買えばいいだろう。
そんな一緒に食べようよ。
タイヤキ？

カステラ？
ミスタードーナッツ。
サーティーワンアイスクリーム。
ミント。
ストロベリー。
なんと。
ありきたりー。
仲良くお喋りをしながら舐める。
何を話したのか、覚えていない。
うろうろと時間を潰す。
お金の圧力で時間を潰す。
やがて街灯がちらつき始め。
空の色彩が濃くなってゆく。
夕食は？
予約してある。
なんだっけ。
焼肉だよ。
学生らしいな。
けれど高級店だよ。
だから服装について指定した？
未成年じゃ気まずいくらいで。
どんなだろうね。
あたしも知らない。
仲良くお喋りをしながら過ごす。
何を話したのか、覚えていない。
色々なことを、
たくさんたくさん、
お互いに話し合った。
笑い合った。
気心の知れた仲だから。

肝心の話題は最後まで。
落し穴のように。
避けておく。
落し物のように。
取っておく。
仲良くお喋りをしながら終わる。
何を話したのか、忘れていたい。
楽しかった。
楽しい時間だった。
そう思う。
それでいい。
それでいいんだな？

＊　＊　＊

とても上品な焼肉店だった。
和風で個室。味付けは濃すぎず薄すぎず、深みがあった。量は控えめで、値段は高め。育ち盛りの僕らにとっては全然足りなかったので、卯生はじゃんじゃん注文した。流石にお酒に手をつけはしなかったけれど、サイドメニュー……和風なので、お品書きと言った方が正しいかもしれないが、それも含めて相当の値段になることは、想像に難くない。
今日の卯生はお大尽様――なのだ。
「ふぅーむ、中々に美味であったぞ。ようやった」
「……、何キャラのつもりだ？」
「ごちそうキャラでした」
「どれだけ美味しいキャラなんだよ、それ」
「あははは」
食後に頼んだお茶を、お互い一口ずつすする。
「でも……結構な額になったんじゃないか？」

「うん。万に食い込んでるのは確かだろねー」
「食事の料金じゃないな。払えるのか？　日中も割と使ったと思うんだけど」
「よゆー」
「そっか、金持ち――」

忌避するのも迂回するのも。
機を伺うのも夢を見るのも。
いいかげん、終わりだろう。
ここいらで、本題に入ろう。

「――だったんだな。渡砂は」
「……うん」
どちらも、表情は、崩さなかった。口調も乱れなかった。
ただただ、間に挟まれた、雰囲気だけが、摩り替わった。
「……やっぱ、気付いてるよね」
「それは、な。気付かない方がどうかしてるだろう。言い出しっぺにして当事者なんだから。でも、わからない部分も多いんだ。質問していいかな？」
「うん。その――資格も、権利も、きーきにはあると思うからね」
「…………」
無言で頷いて。少し、頭の中で質問の順を整理する。完成した生物の試験答案を、見直しする時のような気持ちだった。ほとんど確実な所から、確認するように訊いていこう。心の準備のために、今日を丸一日使ったのだから――あとは、テンポ良くやるだけだ。
「渡砂瀬々斗は自殺した」
「言うまでもないでしょ」
「卯生の動きとしては……この間の雨の日。水曜日――僕を家に送った後――だな？」
「うん。その足でせーせに会って、自殺方法を教えた」

「次の日、木曜日にも会ってる？」
「そうだね。お金を貰ったのもその時」
「渡砂の家に置いてあった……少量の金品。およびアイツのお財布か」
「毎日へそくりを確認する人なんて、居ないからねぇ。へそくりって今でも言うのかな？　ちょっと最近は聞かない響きだよね……。とにかく、その通り――適当に処分してくれって、頼まれたよ」
「そっから今日の金は出てるわけだ。で、渡砂の自殺は、金曜日に実行――卯生は天文部に出たよな。珍しく」
「耳聡いじゃん。それに鋭いね。学校に長い間居た方がいいって思ったからだよ。気分」
「アリバイとか不在証明とは、ちょっと違うだろうからな。あくまで気分……精神的なもの、か。とすると、目撃された不審者ってのは？」
「ちょっとさかのぼって、先週の今日――日曜日にも、渡砂と会った？」
「せーせ自身か、せーせの友達かな。そこは知らないよ」
「良くそこまで判るね」
「半々ってつもりだったけど……メールが、ね」
「ああ。あれはささやかな悲鳴ってか、ヒステリー。ごめんね。意味不明な行動してー」
「あの程度、構わないさ」
「ありがと。……うん。まー……、先週の今日、で、決定的に決別。話し合いも歩み寄りも、失敗に終わっ、ちゃっ、た」
「…………」
　それで、だから。
　あの――月曜日、渡砂は一人で廊下に居たわけだ。独りで悩むために。そして、だから。僕に話し掛けてきたわけだ。偽りの態度、少々の虚勢、他愛無い強がり――ささやかな悲鳴みたいな気分転換を、するために。保呂羽卯生の彼氏と幼馴染の、取るに足らない会

話。日常の合間、僅か十分にも満たない邂逅。
両手の間で湯飲みを弄んでから、間を持たせるようにもう一口。机に戻して。ことん。
「渡砂に……、僕の自殺については？」
「話してないよ。明確には何も。……ななちゃん以外に話さないって、約束——契約したじゃん」
「そっか。そうだったな。……で、大体全部か。僕が訊くべきこと、聞いておきたいこと。最後に一つだけ、これは好奇心みたいなもんだが——教えてくれる？」
「……何？」
「どんな風に振ったんだ？」
ぶふ。
と、ここで卯生は吹いた。面白い顔をした。それから、少しだけ意地悪そうな笑顔を作る。
「あ、は——気になるんだ？」
「なるね」
「んー……」
一瞬、またあの——喫茶店で見せたような——わざとらしい笑みになった卯生だが、思い直したようにすぐ自然な……然るべき表情へ戻す。自然な顔がいつも良い顔だとは限らない。それでも、打算を隠蔽しきれていない、卑屈な感情のはみ出た、歪んだ不自然さよりは、ずっと良い顔だと思う。ノリは軽くて構わない。けれど僕らは、この苦味を否定するべきじゃない。
僕らが否定したら、もう誰も肯定しないのだから。
「そんなに込み入ったことはしてないんだ。この前の水曜日にせーせと会って、こう言う自殺方法があるよって教えて、それから……、『あたしにとって、君は必要な存在じゃない。あたしにとって——も——、せーせは必要なヒトじゃなくなっちゃったんだよ』って、言って。それで終わり」
「も……ね。それだけ？」

「うん、それだけ」
「そうか」
「……、……」
「…………」
「…………ごめん嘘」
あっさり、とそう言う。
「うん？」
「嘘って言うか……そうだね……。もう一言、言ったよ」
「……。なんて？」
「『疲れたなら、死んじゃえば？』」
「……ふぅん、そっ、か……」
それは確定的な台詞だった。
単体では大したことのない、日常会話で発せられることすらある言葉。殺意やら犯意やら、悪意にすら届かないかもしれない。しかし、例えばもし、精神的にぐらついていて、安易な道具を用意された上で、その言葉を投げかけられたとしたら——投げかけてきたのが、最後に手を取った人物だったと、したら。
崖端の背中を突き放つ、
決行の理由と成り得る、
それは確定的な台詞だ。
「——他殺——を装った自殺——と見せかけた、他殺。回りくどいしややこしいけれど……、渡砂の死に方は結局、そうなるのかな。生きる理由を奪うこと——心を殺すと言う行為も、他殺と表現するならね」
僕はそう結論を出した。
目の前の彼女が犯人だ。
「表現すると思うよ。法に規定されてなくてもね。あそこまで導いたのもあたしじゃないし、追い詰めたのもあたしじゃないし、辿り着かせたのもあたしじゃないけれど……でも。最後の一歩を促したのは、きっとあたしだから」

犯人は簡単に自供した。
けど探偵役など不在だ。
端から推理など不必だ。
さて、サスペンスドラマ好きだったのは、はたして誰だったけか。月曜日に交わした取るに足らない会話、あの雑談をおぼろげに思い起こす。知り合いでしかない他人を、記憶に探す。
せーせはね、と、少しの間を置いてから卯生は続けた。
「頑張り屋さんだったよ。勉強も人間関係もね。親御さんの望む自分、自分の望む自分。それに応えようとして、実際に応え続けてきた、凄い奴だよ。だけど、それに追いついていけなくなる自分も、また自覚してた。……どんどん、勝手に追い詰まって行っちゃったんだね。それで、一人ではその重みを抱えきれなくなって、それでも、周囲に気づかれることを良しとしなかった。だから、重みと苦しみを分け合える人を求めた――」
「………」
「で、あたしが選ばれた。最初は良かったけれどね――その内、気持ち悪くなったよ。あたしの存在意義を奪われてるような、あたしの存在領域を侵されてるような、そんな気分。なのに、お互いはお互いに、好きだったんだよ。ラブラブアンブレラだね。――ねぇ、どうしたら良かったと思う――？」
「今更……そう言われてもな。もう終わってる」
「だよね。そのまま腐敗していって、喰い合って。先に音を上げたのはあたし、先に折れたのはせーせ。ま、………うーん。後悔は無いけど」
「けど？」
「ううん――何も、無いかな。何も残らなかった感じ」
「そう、かい」
爽快な笑顔は恋人共々、上っ面。お互いに好き合って、お互いに有能で優良で、だから周囲は気付けない。匂いも漏らさず、腐敗した。身も蓋も無く言ってしまえば、似たもの同士だったんじゃない

だろうか。
ああ。僕の行動に渡砂が目をつけたのは——他人として観測している限り気にもならないであろう行動を読み解けたのは、然るべき内面が在ったからか。シンパシー、トレース、……自己投影。別れ間際の表情には、そんな意味があったのだ。
それに成る程、考えてみれば——政治家の息子——世間体が重要だろう渡砂の家庭では、あの自殺法の成功率は高いかもしれない。息子が自殺したなんてマスコミに叩かれたら、仕事がなくなってしまいかねないのだから。逆に殺されたのであれば、同情を誘って支持を集めることも不可能では無いだろう。そこまでやるかは疑問を残すとして、少なくとも非難の目を最低限避けようと——ご両親がそう言う選択をするであろう確率は、一般家庭よりはずっと高いに違いない。
つくづく何もかもが用意済み。
崖の端と言うよりは蟻地獄か。
冷え切ったお茶を、飲みきった。酷くぬるい、違和感のような喉越し。湯飲みを戻して、ピアノを奏でるように机を撫でる。指先で、とんとんと。拍手するまでも無い、演奏者と観客が同着のフィナーレ……違うな。
渡砂瀬々斗と言う絵画は、これで完成された。少なくとも、僕にとっては。
だから。
お疲れ様だ、渡砂。
「きーきの方は、何か無い？」
「ん？　何かって、何が？」
「あたしがせーせに自殺法を教えちゃったこととか、せーせがその自殺方法をきーきより先に実行しちゃったこととか。恨み言とかつらみ言とか、あるんじゃない？」
「つらみ言ね……」
確かに、同じ方法で死ぬ事はできなくなった。全く同様な手法は

勿論のこと、似たようなものでさえしばらくは使えない。渡砂の狙いを邪魔することにもなるし、自分の方法も上手くは響かないのだから。もしかしたら、卯生はそこまで考えていたのかもしれない……遠まわしに、僕の自殺を止めようと。考えていなくても、今思い至ったのだろう。

　協力をすると言っておきながらの、この結果に。

機嫌を損ねたかもしれないと感じた、のだろう。

　僕はしかし、ゆるりと答えた。

「……まぁ、いいよ。もう一つ他にも、自殺方法を思いついてたからさ。全部台無しってわけじゃない」

「もう一つ……。なになに？」

「身を乗り出すなよ……」

「はい、うーうちゃんが誤解されるコト言わない！　それで？」

「ああ。言わない」

　当たり前だ。

　いや、うーうちゃんが誤解されるようなことじゃない方だ。

「んー……、そっか。まぁ、当然だよね」

「うん」

「きーきの自殺協力契約も、ここまで——だね」

　そう言って、卯生はまた、微笑みを浮かべた。色々と吹っ切れたような、後ろめたさを感じさせない笑顔だった。それでも、ただ……以前の爽快な笑顔よりは、少しだけ暗い。気にならない程度に。

　特に何か違反があったわけではないけれど、それが自然である様に、契約は破綻した。気を利かせて言うならば、契約の方から勝手に自殺したようなものだった。

　仕方がないね。

「……九年前さー」

「ん。唐突に話が飛ぶな……。小二の時の話か」

「うん、そう。付き合ってたのは一年未満だったたっけ。ね、どっちが告ってどっちが振ったか、覚えてる？」

卯生から告白してきて僕から振った。
「覚えてないな」
「そっか」
「そもそも、そんな事実すら忘れてたのに、覚えてるわけないだろ？」
少しの間を置いて。
「あたしは覚えてるけれどね。あはは。ま、そうだよねぇ」
机越しに目線が合う。
予感がしたけど無視をした。
「きーき、さ」
「何？」
「邪魔者も居なくなったことだし、付き合っちゃおうか？」
「…………」
「お似合いだよ、あたし達」
「…………」
「あたしは好きだよ。きーきのこと」
卯生の顔に、偽りは無い。
可愛く、美しく、可愛い。
保呂羽卯生。
成績優秀であり品行方正であり容姿端麗であり明朗快活であり幼馴染ですらあり、しかし、まかり間違っても僕の恋人なんかではなくお互いの片想いすら望むべくもなく、なのに、お互いにデートどころか付き合ったことがあって告白をし合った事すらある、クラスメイトの女子。
「…………」
僕は、コイツみたいに爽やかに。
「…………よせよ」
僕は、コイツみたいに爽やかな笑顔を、したくて。
「僕とお前とじゃ、釣り合わないさ」
僕は、コイツみたいに爽やかな笑顔をしながら、断った。

「……二回目だね」
卯生は、僕みたいな笑顔でそう応じた。
「良い顔できるじゃん。いつもそうやって笑ってたら、きーきってばモテてるよ」
「やめてくれ。もういいんだよ、そーゆーのは」
「そですか」
最後に失笑をして、それから。
やっと、会計を済ませた。
なんとここで卯生の所持金が足りなかった、なんてことがあったら面白かったがそんなことはなく、きっちりと全額奢られる。いいところなし。色めいたことへ進展することも――冗談程度には（冗談だよな？）話に出たが、実際にそんなことは――勿論なく。雑談と談笑を順に繰り返して、家路についた。一応女の子と言うことで、卯生の家まで送っていった。
じゃーね。
またな。
お決まりの文句も忘れずに。
踵を返して、夜を感じながら帰宅。
今日一日、何を話したかなんて、覚えようともしていない。
それでも掛け替えのない日だったように思う。

七頁目

三日前。

月曜日。
学校へ行った。
卯生は欠席だった。
毬雲とは会わなかった。

渡砂はもう居なかった。言うまでもない。

▼　▼　▼

二日前。

火曜日。
学校へ行った。
卯生は欠席だった。
ビブへ行った。毬雲と会った。
適当な雑多を会話した。
ずっと描いていた絵を完成させた。
と言うより、完成したことにした。

毬雲には見せていない。

▼　▼　▼

昨日。

水曜日。
学校へ行った。
卯生はこの日も欠席だった。
毬雲とは会わなかった。
そのまま帰宅。

夜に。部屋を暗くして、泣いてみた。
それが自然だと思ったし、そうしておく必要を感じたからだ。
理由はいくつもある気がしていたが、実際数え上げると片手で事足りてしまいそうで、明確にリストアップはしなかった。名分など並べなくても、涙を流せる程度には悲しかったし……むしろ、痛かった。ありふれた言い方でこの表現はむしろ嫌いなくらいだったが、胸が痛かったのだ。ねじ切れるようだった。
選択の代償、後悔と懺悔、覚悟に自覚。
痛くないわけがない。
結構な量の涙が零れた。それでも滂沱の涙とするには、いささか不足していた。こんなものか、と思った。口にも出して、こんなものか、と言った。こんなものだった。
もう、後が無い。そう、何も無い。
悲しみゆえに涙することは、これから一生無いだろう。
僕は確信しながら、床についた。

明日で終わる。

八頁目（終）

今日。

保呂羽卯生が死んだ。
享年十六歳だった。
自殺だった。
名前は伏せるが、平日の日中にはほとんど人の居ない、快速電車に通過されてしまうような駅。僕たちの学校にはそれほど近くないその場所で、アイツは自殺を行った。両腕を頑ななまでに組んだまま、黄色い線の内側から仰向けに、線路側へ向かって倒れこんだようだ。器用に、狙い済ましたとしか思えないくらいに綺麗に、快速電車に頭部のみを轢かれたのだ。即死だっただろう。
倒れこみ自殺。
首は繋がったままだったらしい。勿論自分の目で確認などしていないから、人づてに聞いた話だ。見てしまったら、食事が美味しくなくなってしまうだろう。違いない。想像に、難くない。
ただ、それはきっと。
考え過ぎて——悩み過ぎて。
首の骨が折れるほどまでに、頭を傾げ過ぎたかのような。
奇妙で、不気味で、何より不思議な、光景だったのだろう。

＊　＊　＊

木曜日。
つまり、一週間……毬雲に告白をされてから、保留の一週間が経過したわけだ。なので今日中に返答をする必要がある。約束は守らなければならないのだから。人として当然のことであって、僕だって最初からそのつもりだ。

面倒なのでメールで返答をすませてしまうと言う選択肢も無いではなかったが、流石にちょっと横着すぎるだろうと、それは選ばなかった。となると、返事を伝える場所を考えなくてはいけない。告白を受けた槍振公園も考えたが、毬雲は電車通学なのだし手間になるだろうと思い直す。そして、順当で適当だろう、僕らの美術室にした。

美術部のない日なので、毬雲にメールを出して呼んでおいた。

一限から六限まで、覚えようともしていないのに暗記してしまった時間割。ざわついている他生徒たちに埋もれながら、授業と休み時間を交互にこなす。ぼうっとしながら、空いている席に目をやったり、板書を写したり、机に突っ伏したり、解説や雑談を聞き流したり。

そのまま放課後まで到達した、今現在。

美術室へ向かおうと、荷物を鞄へ片付けて——いた、ところで。

「……あれ?」

机の中に、手紙を一通、発見した。

薄い空色の、余計な装飾のない、単純な封筒。宛名も差出人もなく、封も軽く閉じてあるだけだった。いぶかしみながらためすがめつ。表、裏。……こんな質素なラブレターが在るはずもない。誰かの忘れ物か何かだろうか——などと思いつつ、開けてしまう。

ルーズリーフが入っていた。

綺麗に四つ折りしてあった。が、一度しわくちゃになった事があるのだろう。丁寧に伸ばされてはいるものの、複雑な皺が残っていた。珍しいものではない。こんなルーズリーフなど、世の中にたくさんあるだろう。元のルーズリーフさえあれば、工場を建てるまでもなく量産するのだって難しくない。皺をつけてたたむだけ。ありふれたものだ。意味なんかない。だからこんなものが、何故か今日、何故か僕の机の中に、何故か置いてあった封筒に、何故か僕へ宛て

たかのように、何故か入っていたところで、何の不思議もない。
だけど。
何故かそのルーズリーフに見覚えがあった。
「　」
何も言わず、四つ折りを開く。
予想通り、様々な自殺方法が羅列してあった。僕の字で。当たり前だ、僕が書いたものだ。僕が書いて、捨てたもので、アイツが拾ったものだ。まだ持っていたのか。返してきたのか。律儀な奴だ。
しかしただ一点、記憶と違っていたところがある。
線路飛び込み。
一度マルが書かれていて、それを上から消されて、隣にバツと書いてあって、
そしてそのバツも消されて、マルに直してあった。
赤いその印――誰書いたかなんて――――――
後頭部をはたかれて振り向いたあの顔。爽やかに参上したあの顔。返答に驚いたあの顔。屋上の階段で微笑んだあの顔。順繰りに読み上げていくあの顔。こめかみに指を当てたあの顔。歪に笑って見せたあの顔。美術部室で我関せずを決め込んだあの顔。絵を見て騒いだあの顔。諦めたように笑ったあの顔。説明を聞いて感心したようなあの顔。一つ傘の下でのあの顔。感情の消え失せたあの顔。開口一番突っ込んだあの顔。一人だけへ向けたあの顔。意地悪そうに笑ったあの顔。自然な感情のままのあの顔。僕みたいに笑ったあの顔。またねと言ったあの顔。
あの顔、あの顔、あの顔、あの顔、あの顔、あの顔、あの顔！
アイツの色々な顔が、眩しいくらい鮮明に、
しかも連続して、とにかくも正確に、
瞬く間もなく、浮かんできた。
中でも。
笑顔。
爽やかな――笑顔。

それが目に付いた。
焼きついて離れない。

＊　＊　＊

なんでアイツは自殺した？
保呂羽卯生は何故死んだ？
保呂羽卯生は渡砂瀬々斗の跡を追った？　彼女と彼が恋人同士であることは、ほとんど公然だったのだから、そう見るのが自然かもしれない。いくら不自然でも、そう見るべきなのかもしれない。そう表現するのが、一番説明がしやすくて、最もしっくりはまるゆえに。
まさか、そんなはずはない。
そんなことで、電車を止めるような——迷惑極まりない方法をとるわけがない。
大人しく首を吊れ、飛び降りろ、手首を搔っ切れ、川で溺れろ、毒を飲め、車に轢かれろ、頭を打ちつけろ、舌を噛め、刃物を突き立てろ。自殺方法なんて、人が死ぬ方法なんて、数え切れない程たくさんあるのに、どうしてとりわけ他人へ迷惑がかかる列車人身事故を狙うのだ。いっそ他人へ迷惑をかけたいならラッシュ時を狙えば良いのに、なにゆえ人もまばらな平日日中なのだ。
だからこれは、だからこれは。
僕へと宛てた、自殺法なんだ。
全ての約束を、卯生は守った。
最初に死ぬな、とは言った。僕の後に死ねとは、言ってない。最初に死んだのは、アイツの彼氏の……アイツの恋人の、渡砂瀬々斗だ。約束は破ってない。考えて考えて死ね、とも言った。考えないで死ぬのは惨めだ、と。腕を組んで首を傾げて、考えすぎてアイツは死んだ。約束は破ってない。契約が破綻してもなお——約束は破っていない。

きちんと三日かけた準備時間。
きちんと返したルーズリーフ。
きちんとそつのない、優等生。
優等生。
幼馴染。
保呂羽卯生は何故死んだ？
なんでアイツは自殺した？
僕への宛て付けか？
振ったからなのか？
――自殺に理由は必要無いと思うよ――？
――あたしも死んじゃおうかな――？

充分すぎる伏線だ。

それでいいのかよ。

――――くしゃっ。

＊　＊　＊

咄嗟に、
ルーズリーフを握り潰していた。
折角綺麗に折りたたまれていたのに。
「…………！」
目を見開いたままだった。呼吸を止めてしまっていた。瞬きを幾度か繰り返し、肩で息をする。大丈夫、他の生徒には目をつけられていない。涙は出なかった。もはや枯れていた。昨日の内に泣いておいて良かったと思った。いや、良いことなど何もない。
何もなかった。

……この時点では、僕は卯生の死なんか知らなかった。
しかし知らなかったと言うだけで。
事実と変わらないくらいに、それは確実だった。
たった一枚の紙切れが、現実を物語っていた。
騒がしかった今日。
風の噂。
そう言う理由があったのかもしれない。
知れない。
知らない。
「……行くか」
僕は荷物を持って、毬雲の待つ美術室へ向かう。
教室から出る際、握っていたルーズリーフをゴミ箱へと捨てた。
拾いあげる不届き者は居なかった。

＊　＊　＊

始めに立ち返ろう。
僕が望んでいた自殺方法の条件は何か？
迷惑をかけない、面倒ではない、絵に描いたような、そして確実な自殺。
「面倒ではない？」
面倒さと言うのは、起こそうとしている動作に自分で価値があると思えないとき、または到達しようとしている目標への距離が思っていたよりも迂遠に見えるとき、つまり無駄へ感じる感情……だと思う。結局自分の感性に合うか合わないか、着手する気になるかならないか――そんな話になってしまうだろうから、あえて条件として掲げなくても良いかもしれない。『面倒くさい』が断念の理由になっても、『面倒くさくない』が実行の理由になることは、厳密にはないのだろうから。
「確実な？」

確実さ。死ねない自殺は滑稽な徒労だ。骨折り損だ。自殺をするからには、確実な方法を選ばなくてはならない。自殺の後ろに未遂と言う単語がついてしまうのは――しかもそんな言葉を背負って生きていくのは、なるべく細心の注意を払って避けていきたいものだ。

「絵に描いたように？」

絵に描いたように死ぬ。これは今まで散々問題や話題にしてきたことで、悩んできたことだ。この話の根幹と言ってもいいだろう。余裕ある自殺者――抜き差しならない状況の精神的重圧に負けてやむなく死を選択する自殺者とは違う、死にたいからと言う理由だけで死ぬ、死に方こそが理由となる、目的と手段の撞着――そんな僕の選択だからこそ、この点が重要だ。……とは言っても、これも感性に合うか合わないか、納得できるかできないかが、結局は論点になってしまう。ラスボスも勇者も自分。だからこの条件も、今更になって見直すほどのものではない。

「そして、迷惑をかけない？」

迷惑をかけない。人が死ぬと――とりわけ現代日本のように平和が確立された社会に於いては――他人へ迷惑がかかる。それでも最小限、他人へ迷惑をかけないで自殺をしようと、方法を模索してきた。結果、『自殺に見せない自殺』、そんな発想へ辿り着いたわけだ。

最初に思いついた方法は、先を越されてしまったけれど。

大体これで全部。それらがここまで、特にこの二週間の間、僕が考えつづけてきた考察の肝となる内容だ。変更する点もないし、よくずっと飽きもせず考えているものだと思う。勿論、四六時中の行住坐臥、頭がその事でいっぱいというわけでもなかったが。

しかし、どうだろう？

本当に僕は他人に迷惑をかけずに死ぬことができるのか。

生きているだけで迷惑だとは確かにその通りだとは思うけれど、死んでしまってはそれ以上に迷惑だろう。カルマを歌うつもりはないものの、今一度それを考えたとき、色々と思うところはあった。

他殺へ見せかけた自殺――それが本当に、最大限迷惑をかけない自殺なのだろうか。
そもそも――自殺ってなんだろうか。
死にさえすれば――それで終わりか。
わかりやすい終止符なのだ。
死にたいよりは終わりたい。
「自殺を考えない人間は居ない……か」
美術室の中で一人おさらいをしながら、吐息のように独り言を漏らしていたところで――カチャッ――と言う音を聞いた。ドアの方に視線を向けたが、まだ開いてはいなかった。ノブに触れて、気後れがしたのか一端離して、そして、もう一度触れて。その間、僕は何も言わずに、向けた目も元の位置に戻して、のんびりと待っていた。
かちゃり。
毬雲が、やっと美術室に入ってくる。
「ちょっと遅れてごめンなさいです。おはろー」
「おはろ」
「……おはろって、世界共通言語ですよね？」
「初めて聞いたよそんなグローバリズム」
「ン。でもでも、日本と英語圏で通じます」
「世界には日本と英語圏しかないのか？」
「え？　違うンです？」
「イタリアに行ってみたいんじゃなかったのかよ……」
「……おおお」
目をパチクリさせて、うんうんと頷くブービー・ヒナナ。
それと、おはようとハローを足した言葉だからって、どちらにも通じるわけじゃない。むしろどちらにも通じなくなると思うんだが……試してみよう、なんでも実験。
「夜の挨拶」
「ぐっどなさいと」

「お食事前に」
「れっつぃーてぃだきます」
「毬雲さんの得意分野は？」
「ぺぃンてぃぬるー！」
「お前宇宙人だったのか」
言語レベルが僕らの世界を凌駕していた。
いや、毬雲はもしかしたら本当に宇宙人なのかもしれない。ビブ星雲からやって来たお絵かき好きの泣き虫星人なのだ。そう考えると、しっくり来ることがたくさんある。……なんて、三流四流ＳＦのような妄想は（面白いけど）脇にやろう。
「ンへへ」
宇宙人はそう笑いながら、向かい合うように座った。
薄暗い中でベンチに隣り合せだった先週の今日とは違い、今はお互いの顔がくっきり見える。蛍光灯に照らされた毬雲の顔と、僕の顔。ほんの少しだけ息苦しくなって、視界をずらした。
毬雲雛鳴。
二年Ｅ組の変わり者。『ブービー・ヒナナ』。知っている人間の中では一番絵が上手い。笑って、怒って、泣いて。感情表現が豊富。舌っ足らず。ロングヘアで、背が小さい。可愛らしい容姿の割に、性格はえげつない。そして、迷わない。決定的、独断的、確信的。自分の世界を持っている。他人の世界を知ろうとしない。
加えて忘れてならないのは、
――お付き合いできませンか。
僕に告白をした少女であること。
視界を戻して中心に毬雲を据えた。
「……えと、ンっ……と」
毬雲の方も、何となく居住まいを正した。
「うん」
お互いの精神の平和のために、確認することから話に入ろう。先週は毬雲にいきなり踏み込まれて、度肝を抜かれたからな。らしく

もなく取り乱して突っ込んでしまったもので、思い返しても恥ずかしい。二の轍は踏むまい。
「もう、一年以上前になるよな……僕と毬雲が知り合ってから」
「ウン。ですですね。最終回みたいです」
「入学式の時にC組の教室で、たまたま名前が近かったから会話が始まったんだったか」
「そうそう、私の方から話し掛けたンですねー」
「だね。その後入学式があって、チュートリアルがあって。数日後の席替えでも、割と近い席だったな」
「ン、でしたっけ？」
「覚えてないのか？　ほら、僕がうっかり前川先生の授業で眠っちゃってた時、起こしてくれただろ」
「あー、はは。あの時私は私で、お絵かきしてたンですけれどー」
「ったく、授業は受けろよな」
「はい。ンでンで？」
「それで、部活紹介で美術部が不在だったくせに、堂々とビブを始めたんだよな。お前は」
「私ビブだもン」
「あの頃はてっきり僕も、美術部は実在するんだって思い込んでたぜ」
「実在するよぅ。してるンです。レンズ付きフィルムじゃないンですよ」
「使い捨てカメラすら絶滅の危機という時期に、その言い方じゃ通じないだろ」
「寂しい話だなぁ……」
「あのさ」
「ン？」
「いい加減突っ込んでくれ……」
「……うぇ？」
首をくりくりと傾げる毬雲だった。

ささやかな意趣返しは失敗だった。
いきなり踏み込むのの逆と言うギャグを試みたつもりだったが、ただの懐かしき思い出四方山話になってしまいそうだった。いわゆる突っ込み待ちだったのだが。毬雲に突っ込みを期待した僕が馬鹿だった、なんて定型句に見事に当てはまってしまう状況だ。返す返す恥ずかしかった。
わざとらしいほど良いとされる咳払いを一つ。
「ふぅ……。一週間、経ったな」
「……はい」
神妙な風に、頷かれる。
「返事をしないとね。生憎僕はこう言うのに慣れてないから、結論を告げるだけになっちゃうんだけれど……」
「私も、うーン、初めてだし、いいよ。です」
「そっか。……まぁ、だろうと思ってたけどさ」
僕が望んでいた自殺。
迷惑をかけない自殺。
そして。
人の心を殺すのも、他殺と表現するのなら。
人間から転倒さえ、転落さえできるのなら。
答えはそこに在った。
誰にとっても残酷なくらいに、そこに在った。
「受けるよ。申し出」
「……と？」
「お付き合いできませんか、に対して、お付き合いしたいとこちらこそ思いますと、応えたんだ」
「……う、うう、うン？」
「だから」
「…………」
「い、いや、意味はわかってるンです」
「そだな……もう、死にません？」

「うん。死なない」
「これから私たち、らヴぁいびと？　です？」
「らぶらぶい恋人」
「ン………。……よろしくお願いします」
両手をわたわたとさせてから、膝の上に揃えて、頭を下げながら毬雲はそう言った。
「こちらこそよろしく」
僕も応じた。
終わりだと、感じた。
終わりだと、決めた。
終わりだと、誓った。
終止符だ。
僕はこれより一切合財、僕のために考えるのを止めよう。思うのを止めよう。感じるのを止めよう。生きるために頭を使うのを止めよう。死ぬために頭を使うのを止めよう。責任を取るのを止めよう。自由を知るのを止めよう。理想を持つことを止めよう。夢想を語ることを止めよう。自分自身であると保証すること、認識すること、自覚することを止めよう。水梳軌跡という人間であることを止めよう。絵を描くのを止めよう。
筆を置こう。
全て。
全て毬雲雛鳴のために。
笑うのも怒るのも泣くのも、全て彼女のために。
決定的に独断的に確信的に描く、彼女の世界へ。
僕は取り込まれよう。
水梳軌跡である水梳軌跡はここで死んだ。
毬雲雛鳴から見た水梳軌跡が在るだけだ。
誰にも迷惑はかからない。
面倒さを感じる心もない。
確実な滅私のみしかない。

そして絵に描いたように。
残りを描くのは全てを全て、彼女に任せよう。
毬雲は絵が得意なのだから。
好きに彩ってくれるはずだ。
「……おっと」
「うン？」
「プレゼントって言うのも拙いけれど……渡したいものがあってさ」
そう言って、僕は机の上に置いておいた紙を渡した。
今週の火曜に完成させた、僕の絵だった。
がらんとした白っぽい背景は、まるで小部屋だ。真ん中の辺りに、林檎のような赤い球形が積んであるように、連ねて描いてある。それらはヒビが口を開けたみたいに、誰かが叩き割ったかのごとく、砕けている。砕けた部分から、赤や黄や暗い青が、噴出して飛び散っていた。様々な色が奇妙に混ざり合い、あまり気持ちの良くない――しかし薄っぺらい、どうでも良いくらいに薄っぺらい水溜りを作っている。
ただそれだけの、抽象画。
意図も意思も何もない。
「軌跡くンの、心かな」
「……心？」
「うン。小部屋が敷居で、いろいろな思いがそこに積ンであるンです。無造作で、自分でも整理がついてないけど、それぞれは丸くて硬くて、どこか甘い。ベタベタ癒着しあってない、って言うのかな。でも硬いから、割れちゃって。傷口から、痛い痛いって色――思い――声が漏れちゃってるンです。それで、その水溜りに、だンだン、沈ンでっちゃってる」
勝手なことを、まるで自明のことであるように――決め付けるように、毬雲は言った。
「………そうか」
「うン。………でも、嬉しいな」

きゅっと。
毬雲は絵を、細く短い腕で、抱き締めた。
にへらっと微笑みながら。
「…………」
僕は——誰の顔も、思い出さなかった。
けれど、微笑み返した。
「あンがとぅ」
「いや、喜んでもらえて嬉しいよ」
「それなら、二倍に嬉しいです」
結局、誰も彼もが、自覚的に無自覚に、気付きながら気付かないまま、自然に不自然に、自分を順繰りに殺していく。それにきっと慣れていく、慣れてしまう。麻痺して、そして死んでゆく。工夫も作為もない、特筆するべくもない、単純な当たり前のお話。人生と言う道。幸せへ通じる道。
自殺を考えない人間は居ない？
考えるな。
「……帰ります？」
「うん。帰るか」
「一緒に帰るンだよ」
「駅まで送るよ。それとも、僕の家に泊まるか？」
「ンへへ……、それはまたいつの日か、です」
「楽しみにしとくな」
僕らはまるで幸福だった。
美術室を揃って後にする。
お疲れ。お休み。

さようなら。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

―――――――――――――――――――――――――――

実行するか否なのか、考えてる時点で同じこと。

水に筆を捨てると、赤は抜けて浮いて広がった。

（水彩度・終。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2975h/

水彩度

2010年10月8日15時55分発行